皆是れ大衆唱導の首なり。

といふが如くで、其の菩薩は皆夥しい眷屬を伴うて居るから、其の總數は實に『無量無邊にして算數譬諭も知ること能はざる所』である。而して、

是の諸の菩薩摩訶薩、地より涌出して、諸の菩薩の種々の讃法を以て佛を讃め奉る。是の如くする時の間、五十小劫を經たり。是の時に釋迦牟尼佛默然として坐し給へり。及び諸の四衆も亦た皆默然たること五十小劫。佛の神力の故に、諸の大衆をして半日の如しと謂はしむ。

とある。さて此の地涌の菩薩の中に四人の導師がある。その一は上行菩薩、その二は無邊行菩薩、その三は淨行菩薩、その四は安立行菩薩である。此の四菩薩が共に合掌して釋尊に對し、御起居如何を訊ね申すに答へて、釋尊は

四人の導師

如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度す可きこと易し、疲勞有ること無し。

と告げたまふ。勿論これは釋尊の御弟子達のことを申されるのである。現世に於て釋尊の教へを蒙るは、過去以來の因緣である。されば、

所以はいかん、是の諸の衆生は世々より已來、常に我が化を受けたり。亦た過去の諸佛に於て供養尊重して諸の善根を種えたり。此の諸の衆生は始め我が身を見、我が所說を聞き、卽ち皆信受して如來の慧に入りにき。先より修習して小乘を學せる者を除く。

といはれたのである。然るに其の小乘に止つた聲聞緣覺などいふものも、法華經を聽くに及んでは、菩薩の道に入るべき心を發する故に、

是の如き人も、我今亦た是の經を聞いて、佛慧に入ることを得せしむ。

と申さるゝのである。玆に於て四菩薩等は偈を以て佛を讃嘆し、佛もまた之に對して

善哉善哉、善男子、汝等能く如來に於て隨喜の心を發せり、

涌出の因緣

と讃められる。

此の時彌勒菩薩を始め、諸菩薩は、斯る地涌の菩薩の現はれたのを不思議に思つて、偈を以て其の因緣を問ふ。先づ其の菩薩達の貴い有樣を稱へて、

巨身にして大神通あり、智慧思議し叵し。其の志念堅固にして大忍辱力有り衆生の見んと樂ふ所なり。

といひ、次に其の數の夥しくあることを述べて、

一々の諸の菩薩所將の諸の眷屬、其の數量有ること無く恒河沙等の如し。或は大菩薩の六萬恒沙を將ゐたる有り、是の如き諸の大衆、一心に佛道を求む。是の諸の大師等、六萬恒河沙あり、俱に來て佛を供養し、及び是の經を護持す。五萬恒沙を將ゐたるは、その數是に過ぎたり。四萬及び三萬、二萬より一萬に至る、一千一百等、乃至一恒沙、半及び三四分、億萬分の一、千萬那由佗、萬億の諸の弟子、乃ち半億に至るは、其の數復た上に過ぎたり。百萬より一萬に至り、一千及び一百、五十と一十と乃至三二一、單己にして眷屬無く獨處を樂ふ者、俱に佛所に來至せるは、其の數轉た上に過ぎたり。是の如き諸の大衆、若し人籌を行て數ふること恒沙劫を過ぐとも、猶ほ盡して知ること能はず。

といひ、斯る無量の菩薩は如何にして菩薩となつた者であるかを知りたいと求め、

是の諸の大威德精進の菩薩衆は、誰か其の爲に法を說き、敎化して成就せる。誰に從つて初めて發心し、何れの佛法を稱揚し、誰の經を受持し行じ、何れの佛道を修習せる。是の如き諸の菩薩、神通大智力あり。四方の地震裂して、皆中より涌出せり。世尊我昔より來、未だ曾て是の事を見ず、願はくば其の所從の國土の名號を說きたまへ。我常に諸國に遊べども、未だ曾て是の事を見ず。我此衆の中に於て乃し一人をも識らず、忽然に地より出たり、

願はくば其の因緣を說きたまへ。

といふ。之に續いて彼の多くの分身諸佛の侍者等も、之に就て知らんことを求め、諸佛は之に對して『やがて釋迦牟尼佛答へたまふべければ、暫く待て』と告げる。これで此の品の前半が終る。

一品二半

此の後半と次の壽量品と、その次の分別品の前半とを合せて『一品二半』といひ、法華經中最も重要な部分である。さて釋尊は一同の疑ひを解く爲に、彼の諸菩薩の來由を語らうとして、まづ彌勒菩薩に向ひ、

汝等當に共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。如來今諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。

といひ、更に偈を說いて

佛は不實の語無し、智慧量る可からず、得る所の第一の法は甚深にして分別し叵し。是の如きを今當に說くべし、汝等一心に聽け。

といひ、然る後に語り出さるゝ所は、

是の諸の大菩薩摩訶薩の無量無數阿僧祇にして地より涌出せる、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、是の諸の菩薩を敎化示導し、其の心を調伏して道の意を發さしめたり。比の諸の菩薩は皆是の娑婆世界の下、此界の虛空の中に於て住せり。諸の經典に於て讀誦通利し、思惟分別して正憶念せり。云々

とあり、次に偈を說いて彼の諸菩薩を稱して、

志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種々の妙法を說いて其の心畏るゝ所無し。

といひ、また

今皆不退に住せり、悉く當に成佛を得べし。

略開近顯遠

といひ、更に重ねて

我今實語を說く、汝等一心に信ぜよ。我久遠より來、是等の衆を敎化せり。

と告げらるゝのである。無量の菩薩盡く釋尊の弟子である、而も久遠以來敎化したる所の弟子であるといふのである。是れ實に釋尊が久遠の佛たることを示さるゝ前提であつて、深く意を留むべき所である。之を『略開近顯遠』の文といふ。此より更に一層の疑問を生む。

根本の疑義

彌勒菩薩等は釋尊が成道以來四十年許を經たに過ぎぬことを知る故に、此の答へに對して更に疑ひを深うせざるを得ぬわけである。乃ち釋尊に向つて、

如來太子たりし時、釋の宮を出で伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此の少時に於て大に佛事を作したまへる。

といひ、更に譬喩を以て、

譬へば人有て色美しく髮黑くして、二十五なる、百歲の人を指して是れ我が子なりと言はん。其の百歲の人亦た年少を指して、是れ我が父なり、我等を生育せりと言はん。是の事信じ難きが如く、佛も亦た是の如し。得道より已來其れ實に未だ久しからず。而るに此の大衆の諸の菩薩等は、已に無量千萬億劫に於て、佛道の爲の故に勤行精進し、善く無量百千萬億の三昧に入出住し、大神通を得、久しく梵行を修し、善く次第に諸の善法を集ひ、問答に巧に、人中の寶として一切世間甚だ爲れ希有なり。云々

と、それが僅に四十年間に敎化したものとは決して信ぜられぬと云ふことを述べ、

我等は復た佛の隨宜の所說、佛の所出の言、未だ曾て虛妄ならずと信じ、佛の所知は皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因緣を起さん。

といひ、其の爲に更に解說して疑を除かれんことを請ふ。また偈を以て此の意を重ねて宣ぶる中に、彼の諸菩薩を稱して

善く菩薩の道を爲して、世間の法に染まざること、蓮華の水に在るが如し。

といひ、また

忍辱の心決定し、端正にして威德有り。

といふは、古より知られた語である。さて

若し此經に於て疑を生じて信ぜざること有らん者は、卽ち當に惡道に墮つべし。願はくば今爲に解說したまへ。

と請ふこと極めて慇懃である。釋尊の之に答へたまふ所が、卽ち次の壽量品である。

16、如來壽量品

日蓮上人は開目鈔の中に『一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に魂の無からんが如くにてあるべし』と記された。壽量品は獨り法華經の中心であるのみならず、一切經の魂であるといふのである。釋尊が久遠の本佛たること明になると共に、此の穢土が卽ち佛の本土たることも明になり、吾々が皆共に久遠の生命を有すべきことも明になる。

世に此より貴いことは無い。

斯の如くに大切な事を告げたまふのである故に、釋尊はまづ諸菩薩及び一切の大衆に對して、

諸善男子、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。

と三たび繰返して告げられる。其の時に彌勒を首として一同の者も、

世尊唯願はくば之を說きたまへ。我等當に佛の語を信受し奉るべし。

と三たび請ふ。斯く三たび請うて止まざるに依て、釋尊はじめて最も重要なる敎へを說き示される。これ卽ち『廣開近顯遠』の文である。

先づ其の説かんとする所の意を一語に總括して示され、次に漸く其の細目に入る。其の總括的の語とは卽ち、

汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を。

の一句である。たゞ此の一句に含まるゝ所の意義は無量である。更に續いて説かるゝ所によれば、

一切世間の天人及び阿脩羅は皆、今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出て伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり。

とある。而して此の無限の久しい間を假に譬喩を以て説明する。所謂『五百塵點』の説である。

如來秘密神通之力

五百塵點劫

譬へば五百千萬億、那由佗阿僧祇の三千大千世界を、假使ひ人有て抹して微塵と爲して、東方五百千萬億、那由佗阿僧祇の國を過ぎて、乃ち一塵を下し、

是の如く東に行いて是の微塵を盡さんが如し。

此の數は固より心力の及ぶ所で無い。然るに釋尊はなほ、

今當に分明に汝等に宣語すべし、是の諸の世界の若しは微塵を著き、及び著かざる者を盡く以て塵と爲して、一塵を一劫とせん。我成佛してより已來、復た此に過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫なり。

と云はるゝのである。之を形容すべき語は固より無いが、假にいへば『久遠』の佛であるといふより外は無い。而して

是より來、我常に此の娑婆世界に在て、説法教化す。亦た餘處の百千萬億、那由佗阿僧祇の國に於ても、衆生を導利す。

とあるに依て、今迄世に出たる無量の諸佛は盡く此の一佛の分身たるに過ぎぬことが明になつた。尙ほ又十方世界に諸佛在すとも、佛の本土といふべきは此の娑婆世界であることも明になつた。

久遠の佛

本佛と迹佛

されば今までに多くの佛が世に出られ、また入滅せられたのも、盡く此の一佛の現はれ給へる所に外ならず、たゞ衆生を導かんが爲に、或は生じ或は滅するの狀を示されたのである。

是の中間に於て我、然燈佛等と說き、又復た其れ涅槃に入ると言ひき。是の如きは皆方便を以て分別せしなり。

とある如く、釋尊の前身が然燈佛であつたといふのも、その外國王であつたとか、何であつたとか種々あるけれども、皆衆生を導かん方便として現はれたまへる者である。

若し衆生有て我が所に來至するには、我佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨て、處々に自ら名字の不同年紀の大小を說き、亦復た現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又種々の方便を以て微妙の法を說いて能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。

とある。淨飯王の子悉達太子として生れ、十九にして出家せられたのも、亦實は凡ての人に、努力次第で何人も佛になれるといふことを示さん爲の方便であつた。卽ち

如來諸の衆生、小法を樂へる德薄垢重の者と見ては、是の人の爲に、我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと說く。然るに我實に成佛してより已來、久遠なること斯の如し。但だ方便を以て衆生を敎化して佛道に入らしめんとして、是の如き說を作す。

とあるに依て、其の意は極めて明である。其の無限の方便は、たゞ衆生をして佛道に入らしめんとの大慈悲心より發するものである。故に

如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脫せんが爲なり。或は己身を說き、或は他身を說き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言說する所は皆實にして虛しからず。

といはるゝのである。但し衆生をして皆正覺を得しめんとには、教を說く所の佛に洪大無邊なる智慧が具有されてあらなければならぬ。卽ち、

如來は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退若しは出有ること無く、亦た在世及び滅度の者無し。實に非ず、虛に非ず、如に非ず、異に非ず。三界の三界を見るが如くならず。斯の如きのこと、如來明に見て錯誤有ること無し。

と云はるゝ所以である。而して種々の教を說かるゝは、聽く者の性質機根種々に異るが故で、之を敎へ導かうといふ慈悲の心固より無限であればこそ、

諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因緣譬諭言辭を以て種々に法を說く。所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。

とある。佛の具へらるゝ力は斯く無限であるが、其の壽も亦同じく無限である。

是の如く我成佛してより已來甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。

然るに滅度が近いといふは何故であるか。常住なる佛が何故に滅を示さなければならぬか。その理由は、

我本と菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶ほ未だ盡きず、復た上の數に倍せり。然るに今實の滅度に非ざれども、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。如來是の方便を以て衆生を敎化す。

とある如く、若し佛が久しく世に在すならば、多くの者は之れに狎れて、却て懈怠の心を生じ、

便ち憍恣を起して厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はず。

といふ樣であらう。然るに佛の入滅近く、一たび入滅したまはゞ再び値遇することは難いといふことになれば、

必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して、便ち善根を種ゆべし。

良醫狂子の喩

といふやうに、善い結果を生ずるであらう。

如來實に滅せずと雖も、而も滅度すといふ。

は實に之が爲である。釋尊は更に譬喩を以て此の意を明にせられる。これ法華七喩の終りのもので、有名なる良醫狂子の喩である。

擣徒和合

一の良醫があつて、智慧聰達にして能く諸の病を治する聞ゑが高かつたが、事によつて遠國へ旅した。此の良醫に多くの子があつた。父の不在中に誤つて毒藥を飲み、大に苦悶して居るところへ父が歸つて來た。父は直ちに子等を救はんが爲に藥を整へた。

諸の經方に依て、好き藥草の色香美味皆悉く具足せるを求めて、擣篩和合して子に與へて服せしむ。而して是の言を作さく、此の大良藥は色香美味皆悉

く具足せり。汝等服すべし、速に苦惱を除いて復た衆の患無けんと。

彼の諸子の中の心を失はぬ者は喜んで此の藥を服して、病は忽ち癒えたが、毒甚しくして心を失つた子等は、此の藥を嫌つて服せなかつた。父は因て或る方便を思ひつき、彼等に向つて、

我今衰老して、死の時已に至りぬ。是の如き良藥を今留めて此に在く。汝取て服す可し、差えずと憂ふること勿れ。

と告げ終つてまた他國へ行き、使を遣はして、父は已に死んだと報ぜしめた。

子等は之を聞いてはじめて正氣になつた。

是の時に諸子、父皆喪せりと聞いて心大に憂惱して是の念を作さく、若し父在しなば我等を慈愍して能く救護せられまし。今我を捨て遠く他國に喪したまひぬ。自ら惟みるに孤露にして復た恃怙無く、常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の色香味の美きことを知て、卽ち取て之を服するに、毒の

自我偈

病皆癒ゆ。

佛が涅槃を示されるのも、亦是の如くである。以上の說を終つて釋尊は更に偈を說かれる。これが所謂『自我偈』である。此の偈のみは特に其の全體を擧げることにする。

我佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり。常に法を說いて無數億の衆生を敎化して佛道に入らしむ、爾來無量劫なり。

と先づ成道の已に久しいことから始めて、過去に施された利益を述べられる。

衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現ず。而も實には滅度せず、常に此に住して法を說く。我常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顚倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ。

『此に住して』とあるは、勿論此の娑婆世界である。以上過去のことを說かれて、次に現在のことに移る。

一心欲見佛不自惜身命

衆は我が滅度を見て廣く舍利を供養し、咸く皆戀慕を懷いて渴仰の心を生ず、衆生旣に信伏し、質直にして意柔輭に、一心に佛を見奉らんと欲して、自ら身命を惜まず。

無上道を知らうとするには、固より是だけの覺悟をもたなければならぬ。日蓮上人の一生を貫いた精神も、要するにこれである。

時に我、及び衆僧俱に靈鷲山に出づ。我時に衆生に語る、常に此に在て滅せず、方便力を以ての故に、滅不滅有りと現ず。餘國に衆生の恭敬し信樂する者あれば、我復た彼の中に於て、爲に無上の法を說く、汝等此を聞かずして但だ我滅度すと謂へり。

三世益物

佛が衆生の爲に勞せらるゝことは、過去に於て斯くの如く、現在に於て斯の如きのみならず、未來に於ても亦永く斯の如くである。

我諸の衆生を見れば、苦海に沒在せり。故に爲に身を現ぜず、其をして渴仰

我此土安穩

を生ぜしむ。其の心に戀慕するに因て、乃ち出て爲に法を說く。神通力是の如し。阿僧祇劫に於て、常に靈鷲山及び餘の諸の住所に在り。

佛が永久に此の土に住みたまふ以上は、此の土が卽ち佛國であるべきこと勿論である。之を穢土と見るのは過である。

衆生劫盡きて大火に燒かると見る時も、我が此土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸の堂閣、種々の寶をもて莊嚴せり、寶樹花果多くして、衆生の遊樂する所なり。曼陀羅華を雨ふらして佛及び大衆に散ず。

『我が此土』といふは他の世界ではない、吾々の住む此の娑婆世界である。この安穩なるが當然な世界を安穩ならしめぬは、吾々の迷ひからである。卽ち

我が淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る。

とあるが如くである。佛を見得る者と見得ぬ者とその差ひによつて此の世界が穢土とも淨土ともなる。

是の諸の罪の衆生は惡業の因緣を以て、阿僧祇劫を過ぐれども、三寶の名を聞かず。諸の有らゆる功德を修し柔和質直なる者は、則ち皆我が身此に在て法を說くと見る。或る時は此衆の爲に佛壽無量なりと說く。久しくあつて乃し佛を見奉る者には、爲に佛には値ひ難しと說く。我が智力是の如し。慧光照すこと無量にして壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり。

されば佛を信ずる者は漸く佛に近づき得べく、卽ち眞の安穩なる生に入るべきである。

汝等智有らん者、此に於て疑を生ずること勿れ。當に斷じて永く盡きしむべし。佛語は實にして虛からず。醫の善き方便をもて狂子を治せんが爲の故に實には在れども而も死すといふに、能く虛妄と說く者無きが如く、我も亦た爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり。凡夫の顚倒せるを爲て實には在れども

佛の常住の說法

而も滅すと言ふ。常に我を見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちん。我常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知て度すべき所に隨て爲に種々の法を說く。

斯く力を盡さるゝは、專ら吾等衆生を疾く佛道に入らしめんが爲である。毎に自ら是の念を作す、何を以て衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめんと。

されば三千年後の今も、佛は此の同じ目的の爲に、此の土に在て絕えず法を說きたまふのである。

分別功德品第十七

17、分別功德品

第十七の分別功德品、略して分別品ともいふ。此の品の前半までが所謂『一品二半』の中である。

佛の壽命の切數、長遠是の如くなるを說きたまふを聞いて、無量無邊阿僧祇の衆生、大饒益を得つ。

といふを以て始まる。時に釋尊は彌勒菩薩に向つて、今までに佛の壽命の長遠なることを聞いて利益を得た者の夥しくあつた事を語られる。この時虛空よりは曼陀羅華を雨ふらし、また栴檀沈水香等をふらし、

虛空の中に於て、天鼓自ら鳴て、妙聲深遠なり。

とある。また千種の天衣をふらし、自然に妙香の薰ずる等の事あり、諸菩薩は妙なる聲を以て頌を歌ふ。彌勒菩薩は座より起つて、合掌して偈を說き、

佛希有の法を說きたまふ、昔より未だ曾て聞かざる所なり。世尊は大力有して、壽命量る可からず。云々

と佛の德を頌し、なほ

世尊無量不可思議の法を說きたまふに、多く饒益する所有ること、虛空の無邊なるが如し。

四信五品

一念信解の功徳

といひ、

佛壽の無量なることを聞いて、一切皆歡喜す。佛の名十方に聞えて廣く衆生を饒益したまふ。一切善根を具して、以て無上心を助く。

といふを以て結ぶ。是で一段落となり、『一品二半』の分は終る。此より以下は法華經を弘むる功徳を數品に亘つて述べらるゝのである。

衆生が法華經を信ずるによつて得べき功徳を種々に分けて說かれたのを、分類して『現在の四信』と『滅後の五品』といふ。先づ第一には『一念信解』の功徳である。卽ち、

其れ衆生有て、佛の壽命の長遠是の如くなるを聞いて、乃至能く一念の信解を生ぜば、所得の功徳、限量有ること無けん。

とあり、なほ其の功徳は布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五波羅蜜を行ずる者にも遠き過ぎたことを示され、更に偈を以て此の意を委しく說かれる。其の次

略解言趣の功徳

廣爲他說の功徳

深信觀成の功徳

には、四信の第二たる『略解言趣』の功徳である。

若し佛の壽命長遠なるを聞いて、其の言趣を解する有らん、是の人の所得の功徳、限量有ること無く、能く如來の無上の慧を起さん。

といふがそれである。第三には『廣爲他說』の功徳で、卽ち

何に況んや廣く是の經を聞き、若しは人をしても聞かしめ、若しは自らも持ち、若しは人をしても持たしめ、若しは自ら書き、若しは人をしても書かしめ、若しは華香瓔珞幢旛繒蓋香油蘇燈を以て經卷を供養せんをや。是の人の功徳無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。

とある。第四には『深信觀成』の功徳で、

若し善男子善女人、我が壽命の長遠なるを說くを聞いて、深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍崛山に在りて、大菩薩、諸の聲聞衆の圍繞せると共に說法する見。又此の娑婆世界、其の地瑠璃にして坦然平正に、閻浮檀金以て八

道を界ひ、寶樹行列して、諸臺樓觀皆悉く寶をもて成じて、其の菩薩衆咸く其中に處するを見ん。

とある。以上は釋尊より親しく敎へを聽いた者の、之を信ずる樣を分類したのであるが、釋尊の滅後に於ける者にも五品の別がある。

隨喜品

其の五品も亦た前の四信の如く、淺きより漸く深きに及ぶものであるが、其の第一は『隨喜品』である。それは

如來の滅後に、若し是の經を聞いて、毀訾せずして隨喜の心を起さん、當に知るべし已に深信解の相と爲く。

讀誦品

とある。次には『讀誦品』である

何に況んや之を讀誦し受持せん者をや。斯の人は則ち爲れ、如來を頂戴し奉るなり。

とあつて、更に之に加へて、

說法品

兼行六度品

是の善男子善女人は、我が爲に復た塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須ゐず。

とある。法華經を讀誦すれば七寶の塔を立てあらゆる供養を爲し、多くの僧を養ふと同じ功德を已に具へた者なのである。第三には『說法品』で卽ち、

如來の滅後に、若し受持讀誦し、他人の爲に說き若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、經卷を供養すること有らんは、復た塔寺を起て及び僧坊を造り、衆僧を供養することを須ゐず。

とある。第四には『兼行六度品』である。之に對しては、

況んや復た人有て、能く是の經を持ち、兼て布施、持戒、忍辱、精進、一心智慧を行ぜんをや。其の德最勝にして無量無邊ならん。譬へば虛空の東西南北四維上下、無量無邊なるが如く、是の人の功德も亦復た是の如し。無量無邊にして疾く一切種智に至らん。

正行六度品

と申されてある。第五のは最高のもので、卽ち『正行六度品』である。

若し人是の經を讀誦し受持し、他人の爲に說き、若しは自らも書き若しは人をしても書かしめ、復た能く塔を起て、及び僧坊を造り、聲聞の衆僧を供養し讃歎し、亦た百千萬億の讃歎の法を以て菩薩の功德を讃歎し、又他人の爲に種々の因緣をもて義に隨て此の法華經を解說し、復た能く淸淨に戒を持ち、柔和の者と共に同止し、忍辱にして瞋無く、志念堅固にして常に坐禪を貴び、諸の深定を得、精進勇猛にして諸の善法を攝し、利根智慧にして善く問難を答へん。

と、斯く凡ての條件を具へた上は、殆んど佛と同樣である故に、

是の人は已に道場に趣き、阿耨多羅三藐三菩薩に近づいて、道樹の下に坐せるなり。

とも、更にまた

則是佛受用

隨喜功德品第十八

行淺功深

是の善男子善女人の若しは坐し、若しは立し、若しは經行せん處、此中には便ち應に塔を起つべし。一切の天人皆供養すること佛の塔の如くすべし。

ともある。斯くて釋尊は偈を以て重ねて此の五品の者を讃めらるゝ中にも、第五の者に於ては特に丁寧であつて、終りに

佛子此地に住すれば、則ち是れ佛受用したまふ。常に其中に在して、經行し若くは坐臥したまはん。

とある。佛子の在る處に、佛の住みたまふ上は、卽ち寂光土たらんこと勿論である。

18、隨喜功德品

滅後五品の中、隨喜品は其の最下のものである。しかし末世に於て法華經の汎く弘まらん爲には、先づ是の最も低いものを奬勵しなければならぬ。而して最も低い者と雖も、其の功德は固より莫大なものである。『行淺く功深し、以て

五十展轉の功德

經力を顯はす』と釋せられたる所以である。第十八の隨喜功德品は、卽ち此の初位の功德を重ねて示されんが爲である。

先づ彌勒菩薩は佛に向つて、此の法華經を聞いて隨喜する者の福如何を問ふ。之に對して釋尊は其の福の非常に大なることを示される。法華經を聞いて隨喜し、之を他の者に語り、他の者が又之を更に他の者に語るといふやうに、其の所聞の如く、父母宗親、善友知識の爲に力に隨て演說せん。是の諸人等聞き已つて隨喜して、復た行て轉敎せん。餘の人聞き已つて亦た隨喜して轉敎せん。是の如く展轉して第五十に至らん。阿逸多、其の第五十の善男子善女人の隨喜の功德を、我今之を說かん。

とある。四百萬億阿僧祇の世界の無量の衆に、其の八十歲になるまで一切の娛樂を與へ、なほ佛法を以て之を敎へ導いて、阿羅漢とならしめたとすれば、其の功德は實に測るべからざるものであらうが、法華經に隨喜する第五十人の者の功德は之に遠く超えて居る。況して初めに聞いて隨喜した人の功德は、なほ更の事である。釋尊は此等の功德を盡く數へて示されて後、更に偈を以て其の意を宣べられる。其の偈は五十展轉の功德を上げて後、

若し一人を勸めて將引して法華を聽かしむること有て、此經は深妙なり、千萬刼にも遇ひ難しと言はん。卽ち敎を受けて往いて聽くこと乃至須臾も聞かん。斯の人の福報、今當に分別し說くべし。世々に口の患無く、齒辣黃黑ならず、唇厚く褰缺ならず、惡む可き相有ること無けん。舌乾き黑短ならず、鼻高脩にして且直からん。額廣くして平正に、面目悉く端嚴にして人に見んと喜はるゝことを爲ん。口の氣臭穢無くして優鉢華の香當に其の口より出でん。若し故らに僧坊に詣り、法華經を聽かんと欲して須臾も聞いて歡喜せん、今當に其の福を說くべし。後に天人の中に生れて、妙なる象馬車珍寶の輦輿を得、及び天の宮殿に乘ぜん。若し講法の處に於て人に勸めて坐して經を聽

かしめん、是の福の因縁をもて釋梵轉輪の座を得ん。何に況んや一心に聽き其の義趣を解說し、說の如く修行せんをや、其の福限る可からず。

といふを以て終る。

19、法師功德品

法師功德品第十九

五品の位の初に於て得る功德すら莫大である。其の終りに得る功德は勿論大層なものでなければならぬ。之を明さんが爲に法師功德品を說かれたのである。法師の功德は六根の清淨なることである。釋尊は常精進菩薩に向ひ、まづ概括して、

若し善男子善女人、是の法華經を受持し、若しは讀み若しは誦し、若しは解說し若くは書寫せん。是の人は當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て六根を莊嚴して皆清淨ならしめん。

六根清淨

眼根

耳根

と告げられ、更に六根を別々に說かれる。先づ眼根に就ては、

父母所生の清淨の肉眼をもて、三千大千世界の內外の有らゆる山林河海を見ること、下は阿鼻獄に至り、上は有頂に至らん。亦た其中の一切衆生を見、及び業の因緣果報の生處、悉く見悉く知らん。

とあつて、その次に偈がある。次に耳根に就ては、

是の清淨の耳を以て三千大千世界の、下は阿鼻地獄に至り上は有頂に至る、其中の內外の種々の有らゆる語言の音聲、象聲、馬聲、牛聲、車聲、啼哭聲愁歎聲、螺聲、鼓聲、鐘聲、鈴聲、笑聲、語聲、男聲、女聲、童子聲、童女聲、法聲、非法聲、苦聲、樂聲、凡夫聲、聖人聲、喜聲、不喜聲、天聲、龍聲、夜叉聲、乾闥婆聲、阿脩羅聲、迦樓羅聲、緊那羅聲、摩睺羅伽聲、火聲、水聲、風聲、地獄聲、畜生聲、餓鬼聲、比丘聲、比丘尼聲、聲聞聲、辟支佛聲、菩薩聲、佛聲を聞かん。要を以て之を言はゞ、三千大千世界の中の一切

内外の有らゆる諸の聲、未だ天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常の耳を以て皆悉く聞き知らん。

とあつて、次に偈がある、

鼻根

鼻根に就ては、

是の清淨の鼻根を以て三千大千世界の上下内外の種々の諸香を聞かん。

とあつて、次に種々の香を具さに擧げ、

皆遙に聞いて其の所在を知らん。此の香を聞くと雖も、然も鼻根に於て壞らず錯らず、若し分別して他人の爲に說かんと欲すれば、憶念して謬らず。

とあり、同じく續いて偈がある。

舌根

舌根に就ては、

若しは好、若しは醜、若しは美、若しは不美、及び諸の苦澁物、其の舌根に在かば、皆變じて上味となり、天の甘露の如くにして、美からざる者無けん。若し舌根を以て大衆の中に於て演說する所有らんに、深妙の聲を出し、能く其の心に入れて皆歡喜し快樂せしめん。

とあつて、其の說を聽くべき者の種類を具さにあげ、終りに

是の菩薩善く說法するを以ての故に、婆羅門居士、國内の人民、其の形壽を盡すまで隨侍し供養せん。又諸の聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛常に樂つて之を見たまはん。是の人の所在の方面には、諸佛皆其處に向ひて法を說きたまはん。悉く一切の佛法を受持し、又能く深妙の法音を出さん。

とあり續いて偈がある。次に身根に就ては、

清淨の身、淨瑠璃の如くにして、衆生見んと喜ふを得ん。其の身淨きが故に三千大千世界の衆生の生ずる時死する時、上下好醜、善處惡處に生ずるが悉く中に於て現ぜん。及び鐵圍山、大鐵圍山、彌樓山、摩訶彌樓山等の諸の山王、及び其中の衆生悉く中に於て現ぜん。下は阿鼻地獄に至り上は有頂に至る所有及び衆生、悉く中に於て現ぜん。若しは聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛の說法する、皆身中に於て其の色像を現ぜん。

意根

とあつて、次に偈がある。最後に意根に就ては、

是の清淨の意根を以て、乃至一偈一句を聞くに、無量無邊の義に通達せん。是の義を解り已つて能く一句一偈を演說すること一月四月、乃至一歲に至らん。諸の所說の法、其の義趣に隨て皆實相と相違背せじ。若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんも、皆正法に順ぜん。三千大千世界の六趣の衆生、心の行ずる所、心の動作する所、心の戲論する所、皆悉く之を知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖も、而も其の意根の清淨なること此の如くならん。是の人の思惟し籌量し言說する所有らんは、皆是れ佛法にして眞實ならざること無く、亦た是れ先佛の經の中の所說ならん。

とあり、續いて偈の中に、

法華を持つを以ての故に、悉く諸法の相を知り、義に隨て次第を識り、名字語言を達して知れる所の如く演說せん。此の人の所說有るは、皆是れ先佛の

皆是先佛法

法ならん。此の法を演ぶるを以ての故に、衆に於て畏るゝ所無けん。

とあるによつて、其の意は愈々明である。而して、

是の人此の經を持ち、希有の地に安住して一切衆生の歡喜して愛敬すること を爲ん。能く千萬種の善巧の語言を以て分別して演說せん、法華經を持つが故なり。

といふを以て偈を終る。

20、常不輕菩薩品

法華經は必ず末世に弘められなければならぬ。末世に當つて之を信じ之を弘むる者の功德は今までの三功德品に悉されてゐる。因て更に之を實行して大なる功德を得やがて成佛したる實例を出して、更に懇に之を奬まさるゝもの、卽ち常不輕菩薩品である。略しては不輕品ともいふ。

釋尊は得大勢菩薩に向つて、過去の威音王佛の時の事を語りたまふ。其の時

人々佛性あり

に常不輕と名くる菩薩があつた。此の人は何人に逢つても、必ず之を禮拜讃歎して、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。

と云ふのが常であつた。又遠くに人の姿を見ても、故らに近く往いて之を禮拜し、

我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべきが故に。

と云つた。之を聞く人々の中には、却て之を惡口罵詈し、

是の無智の比丘、何れの所より來て、自ら我汝を輕しめずと言て、我等が與に當に作佛することを得べしと授記する。我等是の如き虛妄の授記を用ゐず。

といふものも有つた。しかし更に怒りもせず、又恐れもしなかつた。

此の如く多年を經歷して、常に罵詈せらるれども瞋恚を生ぜずして、常に是の言を作す、汝當に作佛すべしと。是の語を說く時、衆人或は杖木瓦石を以て之を打擲すれば、避け走り遠く住して猶ほ高聲に唱へて言く、我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべしと。

不輕の感化

斯く常に云つて居たので、他の者が之に名けて『常不輕』といつたのである。

然るに此人は威音王佛の說きたまへる法華經を受持して、上にあるやうに六根清淨なるを得、更に汎く人の爲に法華經を說いた。茲に於て、

時に增上慢の四衆、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の是の人を輕賤して爲に不輕の名を作せし者、其の大神通力、樂說辯力、大善寂力を得たるを見、其の所說を聞いて、信伏隨從す。

といふ結果を得た。さて此の菩薩は更に多くの佛に値ひ、之を供養し、又法華經を說き弘めること久しかつた功德によつて、終に佛となつたのである。釋尊は此の來歷を語り終つて、更に申さるゝやうは、

爾の時の常不輕菩薩は豈に異人ならんや、則ち我が身是れなり。若し我宿世に於て此の經を受持し讀誦し、他人の爲に說かずんば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。

又彼の不輕菩薩を罵詈した者共に就ては、

瞋恚の意を以て我を輕賤せしが故に、二百億刼常に佛に値はず、法を聞かず、僧を見ず、千刼阿鼻地獄に於て大苦惱を受け、是の罪を畢へ已つて復た常不輕菩薩の阿耨多羅三藐三菩提に敎化するに遇ひにき。

と語られ、なほ

爾の時の四衆の常に是の菩薩を輕しめし者は豈に異人ならんや。今此の會中の跋陀婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘、尼思佛等の五百の優婆塞の皆阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざる者是れなり。

といひ、重ねて法華經の利益の大なることを說かれ、次に偈を以て其の意を反覆せらるゝのである。其の偈は、

我前世に於て是の諸人を勸めて、斯の經の第一の法を聽受せしめ、開示し人を敎へて涅槃に住せしめ、世々に是の如き經典を受持しき。億々萬刼より不可議に至て、時に乃し是の法華經を聞くことを得ん。億々萬刼より不可議に至て、諸佛世尊時に是の經を說きたまふ。是故に行者、佛の滅後に於て是の如き經を聞いて、疑惑を生ずること勿れ。當に一心に廣く此の經を說くべし。世々に佛に値ひ奉り、疾く佛道を成ぜん。

と懇ろに奬めらるゝ語を以て終る。

21、如來神力品

第二十一の如來神力品に至り、愈〻法華經を末世に弘めることを釋尊より付屬せらるゝことになる。最初に地より涌出した無數の菩薩が佛前に於て一心に合掌し、

世尊、我等佛滅後に於て、世尊分身の所在の國土、滅度の處に當て廣く此經を說くべし。所以はいかん、我等亦た自ら是の眞淨の大法を得て、受持讀誦し解說書寫して之を供養せんと欲す。

と白す。玆に於て釋尊は大衆の前に於て大神力を現はしたまふ、所謂『十神力』である。

十神力

廣長舌を出して上梵世に至らしめ、一切の毛孔より無量無數色の光を放つて、皆悉く徧く十方世界を照したまふ。衆の寶樹下の師子座上の諸佛も亦復た是の如く、廣長舌を出し無量の光を放ちたまふ。釋迦牟尼佛及び寶樹下の諸佛神力を現はしたまふ時、百千歲を滿ず。然して後舌相を攝めて一時に謦欬し、俱共に彈指したまふ。是の二の音聲徧く十方の諸佛の世界に至て、地皆六種に震動す。

現在の信一、理一、人一、教一、行一

此までに五神力が現はれて居る、此等は現在に於て信、理、教、人、行の統一せられたるを現はすものである。卽ち『出廣長舌』は釋尊一代の教が法華の眞實に歸することを示すので、『信一』を表する。『毛孔放光』は法華の妙理が十方世界に徧きことを示すので、『理一』を表する。『一時謦欬』は佛の教を說かれた本意がよく一般に通暢したことを示すので『教一』を表する。『俱共彈指』は印度の風として隨喜を表する爲に彈指するので、卽ち一切の者が皆盡く隨喜することを示し『人一』を表する。『六種地動』は皆盡く惑を破つて妙法を行すべきことを示して『行一』を表するのである。

未來の機一

さて彼の十方世界の衆生が此の娑婆世界の有樣を遙かに見て大に歡喜する事、釋尊に對して合掌禮拜する事等が、それ〳〵重要なる意義を示して來る。

佛の神力を以ての故に、皆此の娑婆世界の無量無邊百千萬億の衆の寶樹下の師子座上の諸佛を見、及び釋迦牟尼佛、多寶如來と共に寶塔の中に在て師子の座に坐したまへるを見奉り、又無量無邊百千萬億の菩薩摩訶薩及び諸の四

未來の教一

衆の釋迦牟尼佛を恭敬し圍繞し奉るを見る。既に是を見已つて、皆大に歡喜して未曾有なることを得。

斯く十方世界から、婆娑の大衆が法華を聽かんが爲に會したるさまを見るのは未來に一切の人が法華に歸すべきことを現はすので、これは十神力の第六『普見大會』といひ、未來の『機一』を表する。

即時に諸天、虛空の中に於て高聲に唱へて言く、此の無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて國有り婆娑と名く。是の中に佛有す、釋迦牟尼と名け奉る。今諸の菩薩摩訶薩の爲に大乘經の妙法華、教菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふ。汝等當に深心に隨喜すべし、亦た當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべしと。

此の『空中唱聲』は即ち未來に於て地涌の菩薩が再現して法華經を弘め、凡ての教が之に統一せらるべきことを現はすので、即ち未來の『教一』を表する。

未來の人一、行一、理一

彼の諸の衆生、虛空の中の聲を聞き已つて、合掌して婆娑世界に向て是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。種々の華香、瓔珞旛蓋及び諸の嚴身の具珍寶妙物を以て皆共に遙に婆娑世界に散ず。所散の諸物、十方より來ること譬へば雲の集るが如し。變じて寶帳と成りて徧く此間の諸佛の上に覆ふ。時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。

斯く十方世界の衆生盡く釋尊に對して南無と唱へるのは『咸皆歸命』といひ、未來に凡ての人が皆釋尊に歸すべきことを現はすので、即ち未來の『人一』を表するものである。次に『遙散諸物』の事は凡ての者が皆此の唯一の教を行ずべき時の來らんことを現はすので、即ち未來の『行一』を表する。終りに『通一佛土』は、凡ての國土が眞理によつて統一せらるべきことを示すもので、即ち未來の『理一』を表するのである。斯く之を分つて見れば十神力となるが合せて見れば釋迦一佛の大神力である。

既に神力を示し終つて、釋尊は更に上行等の地涌の菩薩に向ひ、法華經を末世に弘むべきことを命ぜらるゝのである。

若し我是の神力を以て無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に此經の功德を說くとも、猶ほ盡すこと能はず。要を以て之を言はゝ如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯說す。是故に汝等如來の滅後に於て當に一心に受持讀誦解說書寫して、說の如く修行すべし。

塔中別付

是れが則ち『塔中別付』と名けらるゝ所のもので、上行等の地涌の菩薩に特に命ぜられたものである故に、次の屬累品の一般大衆に對しての付屬と區別して『別付』といふのである。こゝに『要を以て之をいはゞ』より下の四句は特に重要なことで、天台大師は之によつて五重玄義を說いた。五重とは、如來の一切の所有の法は『妙名』である、自在の神力は『妙用』である、秘要の藏は『妙體』である、甚深の事は『妙宗』である。皆此經に於て宣示顯說するのは『妙敎』である。名用體宗が具はつて完全なる敎が成立つのである。

名、用、體、宗、敎

斯くして付屬終つて後、釋尊の說き給ふ所の偈の中には、佛滅後に此經を持つ者の貴さが、遺憾なく說き現はされてある。

是の經を屬累せんが故に、受持の者を讃美すること、無量劫の中に於ても猶ほ盡すこと能はず。是の人の功德は無邊にして窮まり有ること無けん。十方の虛空の邊際を得可からざるが如し。

とは先づ概しての說である。さて後に、

能く是の持たん者は則ち爲れ己に我を見、亦た多寶佛及び諸の分身の者を見、又我が今日敎化せる諸の菩薩を見るなり。

といふは、『如來一切所有之法』といふに應じ、

能く是の經を持たん者は、我及び分身、滅度の多寶佛をして一切皆歡喜せし

法華經を持つ者

め、十方現在の佛、竝に過去未來亦は見、亦は供養し、亦は歡喜することを得せしめん。

といふは『自在神力』の妙用を頌するに當り、

諸佛の道場に坐して得たまへる所の秘要の法、能く是の經を持たん者は久しからずして亦た當に得べし。

といふは、『如來一切秘要之藏』といふに應じ、

能く是の經を持たん者は、諸法の義、名字及び言辭に於て樂說窮盡無きこと、風の空中に於て一切障礙無きが如くならん。如來の滅度に於て、佛の所說の經の因緣及び次第を知て、義に隨て實の如く說かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん。

といふは『如來一切甚深之事』といふに應ずるものである。而して

是の故に智有らん者、此の功德の利を聞いて、我が滅度の後に於て斯の經を受持すべし。是の人佛道に於て決定して疑あること無けん。

といふを以て凡てを收束して終る。

22、屬　累　品

特に上行等の菩薩に付屬せられて後、更に釋尊が法座より起つて一般の菩薩に付屬せらるゝことが、第二十二の屬累品中に記されてある。之を塔外付屬とも、總付屬ともいふ。卽ち、

釋迦牟尼佛法座より起て、大神力を現はしたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩て、是の言を作したまはく、我無量百千萬億阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付屬す、汝等當に一心に此法を流布して廣く增益せしむべし。

とある。更に此の意を反覆して命ぜられて後、その法華經を弘めるに就ての心

示教利喜

得を示されて、

如來は大慈悲有り、諸の慳悋無く、亦た畏るゝ所無くして、能く衆生に佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與ふ。如來は是れ一切衆生の大施主なり。汝等亦た隨て如來の法を學すべし、慳悋を生ずること勿れ。

とあり、なほ教を聽く者の性質に應じて、

若し善男子善女人有て、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此の法華經を演說して、聞知することを得せしむべし。其人をして佛想を得せしめんが爲の故なり。若し衆生有て、信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべし。汝等若し能く是の如くせば則ち爲れ己に諸佛の恩を報ずるなり。

とある。されば法華經以外の教を說くのは『示教利喜』の働きであつて、結局法華經の信仰まで導いて來ることを忘れてはならぬのである。以上の說を聞き

諸佛還土

藥王菩薩本事品第二十三

己つて諸菩薩は大に歡喜し、

世尊の勅の如く當に具さに奉行すべし。唯然世尊願はくは慮有さゝれ。

と合掌して三たびまでも誓つた。

斯くして付屬の事全く終つたので、十方世界の分身佛も、多寶佛の塔も各故の如くに還るべき事となり、釋尊は

諸佛各所安に隨ひたまへ、多寶の佛塔還て故の如くしたまふ可し。

と告げられ、多寶佛の塔は閉ぢられて、諸佛は各その本土に還り、虛空會こゝに終つて、釋尊はじめ大衆は皆元の靈鷲山に還る。

23、藥王菩薩本事品

虛空會終り再び靈山會となつて、宿王華菩薩の問に應じて、釋尊は藥王菩薩の難行苦行の事を語らるゝのである。

無量の過去の世に日月淨明德佛といふ佛があつて、一切衆生喜見菩薩等の爲

現一切色身三昧

に法華經を說かれた。之を聞き終つて後、種々の修行を積んで、此の菩薩は十界の一切衆生の形を自在に現ずることが出來るやうになつた。之を『現一切色身三昧』といふ。そこで心大に歡喜して、

我現一切色身三昧を得たる、皆是れ法華經を聞くことを得る力なり。我今當に日月淨明德佛及び法華經を供養すべし。

と云つて盛なる供養を行つた。

虛空の中に於て曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細抹堅黑の栴檀を雨ふらし、虛空の中に滿てゝ雲の如くにして下し、又海此岸の栴檀の香を雨ふらす、此の香の六銖は、價直婆婆世界なり、以て佛に供養す。

とある。然るになほ是だけでは佛恩に報ずるに足らぬと考へた。

自ら念言すらく、我神力を以て佛を供養すと雖も、身を以て供養せんには如かずと。卽ち諸の香、栴檀薰陸、兜樓婆、畢力迦、沈水膠香を服し又瞻蔔、

藥王燒身

諸の華香油を飲むこと千二百歲を滿し已つて、香油を身に塗り、日月淨明德佛の前に於て、天の寶衣を以て自ら身に纏ひ已つて、諸の香油を灌ぎ、神通力の願を以て自ら身を然して、光明徧く八十億恒河沙の世界を照す。……其の身の火然ゆること千二百歲是を過ぎて已後、其身乃ち盡きぬ。

其の後また生れて淨德王の子となり、父に向つて自ら其の過去の苦行を語り、其の日月淨明德佛は今なほ在す故に更に之を供養すべしと告げ、直ちに佛の所に到つて、偈を以て佛を讃めた。其の時佛は、我已に滅度の時に達したと告げられ、なほ

善男子、我佛法を以て汝に屬累す。及び諸の菩薩大弟子、並に阿耨多羅三藐三菩提の法、亦た三千大千七寶の世界、諸寶樹寶臺及び給侍の諸天を以て悉く汝に付す。我滅度の後、所有の舍利亦た汝に付屬す。當に流布せしめ廣く供養を設くべし、若干の千の塔を起つべし。

と命ぜられた。斯くて佛の滅度となつたので、一切衆生喜見菩薩は悲感懊惱して戀慕の念に堪へず、栴檀の樹を以て佛身を燒き、殘つた舍利を取り收め、八萬四千の塔を立てゝ之を供養した。しかし未だ是だけでは滿足しなかつた。

自ら念言すらく、我是の供養を作すと雖も、心猶ほ未だ足らず、我今當に更に舍利を供養すべしと。便ち諸の菩薩大弟子、及び天龍夜叉等の一切の大衆に語らく、汝等當に一心に念ずべし、我今日月淨明德佛の舍利を供養せんと。是の語を作し已つて、即ち八萬四千の塔の前に於て百福莊嚴の臂を然すこと七萬二千歲にして以て供養す。無數の聲聞を求むる衆、無量阿僧祇の人をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、皆現一切色身三昧に住することを得せしむ。

然るに諸菩薩等は其の臂を燒き失つたのを見て大に之を悲んで、

此の一切衆生喜見菩薩は是れ我等が師、我を敎化したまふ者なり。而るに今臂を燒いて身具足したまはず。

と云つて歎いた。茲に於て一切衆生喜見菩薩は大衆の中に於て誓を立て、

我兩の臂を捨て必ず當に佛の金色の身を得べし。若し實にして虛しからずんば、我が兩の臂をして還復すること故の如くならしめん。

といふと共に兩臂は元の如くなつた。此の時三千大千世界は六種に震動し、天よりは寶華を雨ふらした。

釋尊は以上の物語りを終つて、此の一切衆生喜見菩薩が即ち今の藥王菩薩であると明され、更に藥王菩薩が斯る苦行を積んで得たる法華經の最も尊貴なることを譬喩を用ゐて示される。即ち所謂『十喩校量』である。

譬へば一切川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し。諸の如來所說の經の中に於て、最も爲れ深大なり。

又土山、黑山、小鐵圍山、大鐵圍山及び十寶山、衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し。諸經の中に於て、最も是れ其上なり。

といふは第二の喩である。

又衆星の中に月天子最も爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て最も爲れ照明なり。

といふは第三の喩である。

又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此經も亦復た是の如し。能く一切不善の闇を破す。

といふは第四の喩である。

又諸の小王の中に轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く、此經も亦復た是の如し。衆經の中に於て最も爲れ其尊なり。

といふは第五の喩である。

又帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く、此經も亦復た是の如し、諸經の中の王なり。

といふは第六の喩である。

又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此經も亦復た是の如し。一切の賢聖學無學、及び菩薩の心を發す者の父なり。

といふは第七の喩である。

又一切の凡夫人の中に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛爲れ第一なるが如く、此經も亦復た是の如し。一切の如來の所說若しは菩薩の所說、若しは聲聞の所說、諸の經法の中に最も爲れ第一なり。能く是の經典を受持すること有らん者も亦復た是の如し。一切衆生の中に於て亦た爲れ第一なり。

といふは第八の喩である。

十二德用

一切の聲聞辟支佛の中に菩薩爲れ第一なり、此經も亦復た是の如し。一切の諸の經法の中に於て最も爲れ第一なり。

といふは第九の喩である。

佛爲れ諸法の王なるが如く、此經も亦復た是の如し、諸經の中の王なり。

といふは其の第十の喩である。更に此の經によりて與へらるゝ拔苦與樂の用を、十二の譬喩を以て示される。

此經は一切衆生をして諸の苦惱を離れしめたまふ、此經は能く大に一切衆生を饒益して其の願を充滿せしめたまふ。清涼の池の能く一切諸の渴乏の者に滿るが如く、寒き者の火を得たるが如く、裸なる者の衣を得たるが如く、商人の主を得たるが如く、子の母を得たるが如く、渡に船を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、貧に寶を得たるが如く、民の王を得たるが如く、賈客の海を得たるが如く、炬の暗を除くが如く、此の法華

經も亦復た是の如し。

更に重ねて法華經を持つの功德を述べ、特に女人往生の事を明されるのである。

若し人有て是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦た無量無邊の功德を得ん。若し女人有て是の藥王菩薩本事品を聞いて能く受持せん者は、是の女身を盡して後に復た受けず。若し如來の滅後、後の五百歲の中に、若し女人有て是の經典を聞いて說の如く修行せば、此に於て命終して卽ち安樂世界の阿彌陀佛、大菩薩衆の圍繞せる住處に往いて蓮華の中、寶座の上に生ぜん。復た貪欲に惱まされず、亦復た瞋恚愚痴に惱まされず、憍慢嫉妒諸垢に惱まされず、菩薩の神通無生法忍を得ん。

此の阿彌陀佛も亦た釋迦牟尼佛の分身の一であることは、涌出品に於て既に明なることである。されば淨土三部經に於て阿彌陀佛を絕對至高の佛として現

はしてあるのとは、其の意義が同じで無い。既に虚空會の座に到り、釋迦牟尼佛の說かるゝ所の盡く眞實であることを證する一人となつた以上、法華經を持つ者を阿彌陀佛も護られぬ筈は無い理である。此の法華經を持つ者は、諸佛共に之を讃めて、

汝能く釋迦牟尼佛の法の中に於て、是の經を受持讀誦し思惟し、佗人の爲に說けり。所得の福德無量無邊なり。火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず。汝の功德は千佛共に說けども盡さしむること能はず。汝今已に能く諸の魔賊を破し、生死の軍を壞し、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり。善男子、百千の諸佛神通力を以て共に汝を守護したまふ。一切世間の天人の中に於て、汝に如く者無し。唯だ如來を除いて、其諸の聲聞、辟支佛、乃至菩薩の智慧禪定も汝と等き者有ること無けん。

と申さるゝであらうとある。釋尊は以上の功德を述べ終つて、改めて宿王華菩薩に向ひ、

後五百歲

我が滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕して惡魔々民諸天龍夜叉鳩槃茶等に其の便を得せしむること無かれ。宿王華、汝當に神通の力を以て是の經を守護すべし。所以はいかん、此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病卽消滅して不老不死ならん。

と命ぜられる。後の五百歲は卽ち末法の世の初めである。

24、妙音菩薩品

妙音菩薩品第二十四

是の時釋尊は肉髻の光明を放ち、及び眉間の白毫の光を放つて、東方の諸佛の世界を照したまふ。こゝに淨華宿王智佛の國に、妙音菩薩といふ菩薩があつて。此の光に照されて娑婆世界へ來ることを思ひ立つ。此より妙音菩薩品が始まるのである。妙音菩薩は淨華宿王智佛に向ひ、

世尊我當に娑婆世界に往詣して、釋迦牟尼佛を禮拜し親近し供養し、及び文殊師利法王子菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、宿王華菩薩、上行意菩薩、莊嚴菩薩、藥上菩薩を見るべし。

と請ふ。因て淨華宿王智佛は、

汝彼の國を輕しめて、下劣の想を生ずること莫れ。

と戒めて後之を許される。妙音菩薩は乃ち三昧に入り、その三昧力を以て靈鷲山に蓮華を現はし然る後に八萬四千の菩薩と共に其の國を發して、釋尊の許に來る。その有樣の莊嚴なることは、

所經の諸國六種に震動して、皆悉く七寶の蓮華を雨ふらし、百千の天樂、鼓せざるに自ら鳴る。是の菩薩の目は廣大の靑蓮華の葉の如し。たとひ百千萬の月を和合せりとも、其の面貌端正なること復た此に過ぎん。身は眞金の色にして無量百千の功德莊嚴せり。威德熾盛にして光明照曜し、諸相具足して

妙音菩薩の來往

那羅延の堅固の身の如し。七寶の臺に入て虛空に上昇し、地を去ること七多羅樹、諸の菩薩衆恭敬し圍繞して此の娑婆世界、耆闍崛山に來詣す。

といふ如き樣である。已に七寶の臺を下つて、釋尊を禮拜して起居を問ひ、又七寶塔の外から多寶佛の起居を問ひ、多寶佛は塔の中から、

善哉善哉、汝能く釋迦牟尼佛を供養し、及び法華經を聽き、並に文殊師利等を見んが爲の故に此に來至せり。

と讃められる。玆に於て華德菩薩は釋尊に向つて、是の妙音菩薩は如何なる善根を種え功德を修して斯る神力を有するのかと問ひ、釋尊之に答へたまふことになる。

過去に雲雷音王佛といふ佛が在した時に、此の妙音菩薩は十萬種の伎樂を以て此の佛に供養し、また八萬四千の七寶の鉢を奉つた。又無量の諸佛に供養して久しく德本を植えたる功德によつて、今は種々の身を現じて法を說くことを

三十四身を現す

得るやうになつたのである。

汝但だ妙音菩薩其の身此に在りとのみ見る。而も是の菩薩は種々の身を現じて、處々に諸の衆生の爲に其の經典を說く。或は梵王の身を現じ、或は帝釋の身を現じ、或は自在天の身を現じ、或は大自在天の身を現じ、或は天大將軍の身を現じ、或は毗沙門天王の身を現じ、或は轉輪聖王の身を現じ、或は諸の小王の身を現じ、或は長者の身を現じ、或は居士の身を現じ、或は宰官の身を現じ、或は婆羅門の身を現じ、或は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を現じ、或は長者居士の婦女の身を現じ、或は宰官の婦女の身を現じ、或は婆羅門の婦女の身を現じ、或は童男童女の身を現じ、或は天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の身を現じて是の經を說く。諸有の地獄、餓鬼、畜生、及び衆の難處皆能く救濟す。乃至王の後宮に於ては變じて女身と爲て是の經を說く。

以上で有名なる三十四身を現ずることになる。之に次に出す所の四聖身を合せて三十八身となるのである。

是の菩薩は若干の智慧を以て、明に娑婆世界を照して、一切衆生をして各所知を得せしむ。十方恒河沙の世界の中に於ても、亦復た是の如し。若し聲聞の形を以て得度すべき者には、聲聞の形を現じて爲に法を說き、辟支佛の形を以て得度すべき者には、辟支佛の形を現じて爲に法を說き、菩薩の形を以て得度すべき者には、菩薩の形を現じて爲に法を說き、佛の形を以て得度すべき者には、卽ち佛の形を現じて爲に法を說く。是の如く種々に度すべき所の者に隨て爲に形を現ず。乃至滅度を以て得度すべき者には滅度を示現す。此の聲聞より佛までが四聖である。此と前のと併せて十界の姿を盡く現ずることが出來るのである。斯く有らゆるものに變現し得るは『現一切色身三昧』を得たるが故である。

釋尊の說きたまふ所終り、妙音菩薩も旣に釋尊及び多寶佛塔に供養すること、終つて其の本土に還り、淨華宿王智佛の許に至て事の由を報ずる。

25、觀世音菩薩普門品

觀世音菩薩普門品第二十五

時に無盡意菩薩は釋尊に向ひ、觀世音菩薩は何の因緣あつて觀世音と名くるかと問ひ、釋尊之に答へたまふ。これ卽ち觀世音菩薩普門品である。先づ

若し無量百千萬億の衆生有て諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞いて、一心に名を稱せば、觀世音菩薩卽時に其の音聲を觀じて皆解脫することを得せしめん。

とあつて、それより觀世音菩薩を念ずるによつて七難を脫し得べきことを順を追うて擧げ、その次に

若し衆生有て婬欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば便ち欲を離るゝことを得ん。若し瞋恚多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば便ち瞋を離るゝことを得ん。若し愚癡多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば便ち癡を離るゝことを得ん。

とあり、又その次に

若し女人有て設ひ男を求めんと欲し、觀世音菩薩を禮拜し供養せば便ち福德智慧の男を生まん。設ひ女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生まん。

とある。更に無盡意菩薩の問に應じて示さるゝ所が卽ち其の三十三身を示現する事で、古來甚だ有名なことである。

三十三身の變現

若し國土の衆生有て、佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩卽ち佛身を現じて爲に法を說き、辟支佛の身を以て得度すべき者には、卽ち辟支佛の身を現じて爲に法を說き、聲聞の身を以て得度すべき者には、卽ち聲聞の身を現じて爲に法を說き、梵王の身を以て得度すべき者には、卽ち梵王の身を現じて爲に法を說き、帝釋の身を以て得度すべき者には、卽ち帝釋の身を現じ

て爲に法を說き、自在天の身を以て得度すべき者には、卽ち自在天の身を現じて爲に法を說き、大自在天の身を以て得度すべき者には、卽ち大自在天の身を現じて爲に法を說き、天大將軍の身を以て得度すべき者には、卽ち天大將軍の身を現じて爲に法を說き、毗沙門の身を以て得度すべき者には、卽ち毗沙門の身を現じて爲に法を說き、小王の身を以て得度すべき者には、卽ち小王の身を現じて爲に法を說き、長者の身を以て得度すべき者には、卽ち長者の身を現じて爲に法を說き、居士の身を以て得度すべき者には、卽ち居士の身を現じて爲に法を說き、宰官の身を以て得度すべき者には、卽ち宰官の身を現じて爲に法を說き、婆羅門の身を以て得度すべき者には、卽ち婆羅門の身を現じて爲に法を說き、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を以て得度すべき者には、卽ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を現じて爲に法を說き、長者、居士、宰官、婆羅門の婦女の身を以て得度すべき者には、卽ち婦

女の身を現じて爲に法を說き、童男童女の身を以て得度すべき者には、卽ち童男童女の身を現じて爲に法を說き、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の身を以て得度すべき者には、卽ち皆之を現じて爲に法を說き、執金剛神を以て得度すべき者には、卽ち執金剛神を現じて爲に法を說く。

斯く種々の形を自由に現はして諸の國土に遊び、汎く衆生を救はるゝ故に、更にまた之を稱して、

是の觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏急難の中に於て、能く無畏を施す、是故に此の娑婆世界に皆之を號して施無畏者と爲す。

ともある。以上釋尊の說かるゝ所を聞いて、無盡意菩薩は頭に懸けた瓔珞を解いて觀世音菩薩に捧げ、觀世音菩薩は之を辭して、釋尊の勸めによつて初めて之を受け、分て二つとして其の一を釋尊に、その一を多寶佛の塔に奉る。こゝ

十二難

念彼觀音力

に釋尊は重ねて偈を以て觀世音菩薩の利益を頌せられるのであるが、此には前にあげた七難になほ五難を加へ、十二難を脱れることになつて居る。

名を聞き及び身を見、心に念じて空しく過ぎざれば能く諸有の苦を滅す。たとひ害意を興して大火坑に推落さんに、彼の觀音の力を念ぜば、火坑變じて池と成らん。或は巨海を漂流して龍魚諸鬼の難あらんに、彼の觀音の力を念ぜば、波浪も沒すること能はじ。或は須彌の峰に在て人に推墮されんに、彼の觀音の力を念ぜば、日の如く虚空に住せん。或は惡人に逐はれて金剛山より墮落せんに、彼の觀音の力を念ぜば、一毛をも損ずること能はじ。或は怨賊の繞んで各刀を執て害を加ふるに値はんに、彼の觀音の力を念ぜば咸く即ち慈心を起さん。或は王難の苦に遭て、刑せらるゝに臨んで壽終らんと欲せんに、彼の觀音の力を念ぜば、刀尋いで段々に壞れなん。或は枷鎖に囚禁せられ、手足に杻械を被らんに、彼の觀音の力を念ぜば、釋然として解脱を得

ん。咒詛諸の毒藥に身を害せんと欲せられんに、彼の觀音の力を念ぜば、還て本人に著きなん。或は惡羅剎、毒龍諸鬼等に遇はんに、彼の觀音の力を念ぜば、時に悉く敢て害せじ。若しは惡獸圍繞して利牙爪怖る可からんに、彼の觀音の力を念ぜば、疾く無邊の方に走らん。蚖蛇及び蝮蠍、氣毒煙火の燃ゆるが如くならんに、彼の觀音の力を念ぜば、聲に尋いで自ら回り去らん。雲雷鼓擊電し、雹を降らし大雨を澍がんに、彼の觀音の力を念ぜば、時に應じて消散することを得ん。

以上卽ち十二難を救ふことを頌せらるゝのである。偈の句はなほ續く、

衆生困厄を被て、無量の苦身に逼らんに、觀音妙智の力能く世間の苦を救ふ。神通力を具足し、廣く智の方便を修め、十方諸の國土に刹として身を現ぜざること無し。種々諸の惡趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ。眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀あり。常に願ひ常に瞻仰

すべし。無垢清淨の光、慧日諸の闇を破し、能く災の風火を伏して、普く明に世間を照す。悲體戒雷震の如く、慈意の妙なる大雲、甘露の法雨を澍ぎ、煩惱の燄を滅除す。諍訟して官處を經、軍陣の中に怖畏せんに、彼の觀音の力を念ぜば、衆怨悉く退散せん。妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音あり。是故に須く常に念ずべし、念々に疑を生ずること勿れ。觀世音淨聖は苦惱死厄に於て能く爲に依怙と作れり。一切の功德を具して、慈眼をもて衆生を視る、福聚の海無量なり。是故に頂禮すべし。

その時、持地菩薩座より起つて、此の普門品を聞いた功德を拜謝して終る。

26、陀羅尼品

法華經を持つの功德は遺憾なく明にせられたが、末世には困難の數、迫害の數は固より非常に多かるべきである。其の多くの障礙に對して法華經を持つ者を護る爲に、神呪を與へることが第二十六の陀羅尼品に示されてある。先づ藥王菩薩は釋尊に對して、法華經を受持する者の得べき福に就て問ひ、釋尊之に答へられて後、さらば其の說法者に陀羅尼呪を與へて以て之を守護せんとて、四十三句の陀羅尼を說く。次に勇施菩薩も亦た十三句の陀羅尼を說く。次に毗沙門天王も六句の陀羅尼を說く。持國天王も九句の陀羅尼を說く。

時に十人の羅刹女があつて、其の一を藍婆、其の二を毗藍婆、其の三を曲齒、その四を華齒、その五を黑齒、その六を多髮、その七を無厭足、その八を持瓔珞、その九を皐諦、その十を奪一切衆生精氣といふ。此の十羅刹女が鬼子母及びその眷屬と共に來て、法華經を受持する者の爲に十九句の陀羅尼を說き、

寧ろ我が頭の上に上るとも、法師を惱すこと莫れ。云々

といひ、且偈を說いて、

若し我が呪に順ぜずして說法者を惱亂せば頭破れて七分に作ること、阿梨樹の枝の如くならん。父母を殺す罪の如く、亦た油を壓す殃、斗秤をもて人を

欺誑し調達が破僧罪の如く、此の法師を犯さん者は、當に是の如き殃を獲べし。

といふ。なほ又佛に向つて、

我等亦た當に身自ら是の經を受持讀誦し修行せん者を擁護して、安穩を得、諸の衰患を離れ、衆の毒藥を消せしむべし

といふ。因て釋尊は之を讃め、なほ永く法華を受持する者を擁護せよと命ぜられる。

妙莊嚴王本事品第二十七

27、妙莊嚴王本事品

次には妙莊嚴王本事品、略しては嚴王品ともいふ。卽ち釋尊が妙莊嚴王と其の二子との事を語られるのである。王には淨德夫人といふ賢夫人があり、二子が有つて一を淨藏といひ、一を淨眼といつた。此の二子は久しく菩薩の道を修して貴い人々であつたが、父王は外道を信じて居た。其の時に雲雷音宿王華智

夫人と二子

佛が法華經を說き給ふ事となつたので、二子は母の夫人の所へ行つて、共に法華經を聽きに行くことを請うた。母の夫人は王が外道を信じて居ることを語つたので、二子は

我等は是れ法王の子なり、而るに此の邪見の家に生れたり。

と云つて歎いた。母はなほ二子に向つて、

汝等當に汝が父を憂念して爲に神變を現ずべし。若し見ることを得ば、心必ず淸淨ならん。或は我等が佛所に往至することを聽されん。

と告げた。二子は乃ち父の所へ行き、種々の神變を示し父の心を淸淨ならしめた。父王は心大に觀喜して、汝等は誰を師として斯る力を具ふるに至つたかと問ひ、雲雷音宿王華智佛のことを聞いて、共に其の佛の所へ行かうと望んだ。母の夫人も之を聞いて共に喜んだ。二子は父母に向つて、

善哉父母、願はくば時に雲雷音宿王華智佛の所に往詣して親覲し供養したま

二子は善知識

へ。所以はいかん、佛には値ひ奉ることを得難し。優曇波羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値へる如し。而るに我等宿福深厚にして佛法に生れ値へり。是故に父母當に我等を聽して出家することを得せしめたまふべし。所以はいかん、諸佛には値ひ奉り難し、時にも亦た遇ふこと難し。

と告げた。茲に於て王と夫人と二王子とは、共に多くの群臣眷屬を連れて佛の所へ詣つたので、佛は之が爲に法を說きたまひ、王は大に歡悅した。佛はまた王が必ず修行を積んで後に佛となるべきことを許された。王は出家して久しい間常に勤め精進して法華經を修行し、自ら神變の力を具へるやうになつてから、佛に向つて、

世尊、此の我が二子、已に佛事を作しつ、神通變化を以て我が邪心を轉じて佛法の中に安住することを得、世尊を見奉ることを得せしむ。此の二子は、是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して我を饒益せんと欲するを爲(もつ)ての故に、我が家に來生せり。

といひ、佛も『汝が所言の如し』と許されて、なほ

善知識は是れ大因緣なり。所謂化導して佛を見、阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得せしむ。大王汝此の二子を見るや不や、此の二子は已に曾て六十五百千萬億那由佗恒河沙の諸佛を供養し、親近し恭敬して諸佛の所に於て法華經を受持し、邪見の衆生を愍念して正見に住せしむ。

と告げられた。釋尊は以上の物語りを終つて、

妙莊嚴王は豈に異人ならんや、今の華德菩薩是れなり、其の淨德夫人は、今の佛前に光をもて照せし莊嚴相菩薩是れなり。妙莊嚴王及び諸の眷屬を哀愍せしが故に、彼の中に於て生ぜり。其の二子は今の藥王菩薩、藥上菩薩是れなり。

と告げ、なほ二菩薩の功德を稱讃せられる。

28、普賢菩薩勸發品

二十八品の終結を爲すものは普賢菩薩勸發品である。時に普賢菩薩は無數の菩薩等と共に、東方より此の娑婆世界の耆闍崛山に來り、釋尊を禮拜して、

我寶威德上王佛の國に於て、遙に此の娑婆世界に法華經を說きたまふを聞いて、無量無邊百千萬億の諸の菩薩衆と共に來て聽受す。唯だ願はくば世尊、當に爲に之を說きたまふべし。若し善男子善女人、如來の滅後に於て、云何してか能く是の法華經を得ん。

と問ふ。釋尊は之に答へて、

若し善男子善女人、四法を成就せば、如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし。一には諸佛に護念せらるゝことを爲え、二には諸の德本を植え、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發せるなり。

と告げられる。普賢菩薩は乃ち佛に向つて、

世尊、後の五百歲、濁惡世の中に於て、其れ是の經典を受持すること有らん者は、我當に守護して其の衰患を除き、安穩なることを得せしめ、伺ひ求むるに其の便を得る者無からしむべし。

といひ、又魔とか鬼とかいふ類の人を惱ます者にも皆便りを得せしめぬやうに護らうといひ、更にまた

是の人若しは行き若しは立て此經を讀誦せば、我爾の時に六牙の白象王に乘て、大菩薩衆と俱に其の所に詣て、自ら身を現じて供養し守護して其の心を安慰せん。亦た法華經を供養せんが爲の故なり。是の人若し坐して此經を思惟せば、爾の時に我復た白象王に乘て、其の人の前に現ぜん。其の人若し法華經に於て一句一偈をも忘失する所有らば、我當に之に敎へて共に讀誦し、還て通利せしむべし。爾の時に法華經を受持し讀誦せん者、我が身を見ることを得て、甚だ大に歡喜して、轉た復た精進せん。我を見るを以ての故に卽ち

三昧及び陀羅尼を得ん。

といひ、又更に

若し後の世の後の五百歳、濁惡世の中に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の求索せん者、受持せん者、讀誦せん者、書寫せん者、是の法華經を修習せんと欲せば、三七日の中に於て一心に精進すべし。三七日を滿し已らんに、我當に六牙の白象に乘て無量の菩薩の而も自ら圍繞せると、一切衆生の見んと喜ぶ所の身を以て、其の人の前に現じて、爲に法を說いて示教利喜すべし。亦復た其に陀羅尼呪を與へん。是の陀羅尼を得るが故に、非人の能く破壞する者あること無けん。亦た女人に惑亂せられじ。我が身亦た自ら常に是の人を護らん。

と云つて、乃ち二十句の呪を說く。さて後また改めて法華經を受持する者の功德を稱し、

閻浮提内廣令流布

世尊、我今神通力を以ての故に、是の經を守護して、如來の滅後に於て、閻浮提の内に廣く流布せしめて、斷絕せざらしめん。

と誓ふ。

釋尊は之に對して、其の法華經を守護するの功德を讃めたまひ、

普賢、若し是の法華經を受持讀誦し、正憶念し、修習し、書寫すること有らん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり。佛口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。當に知るべし、是の人は佛善哉と讃む。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の手をもて其の頭を摩することを爲ん。當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことを爲ん。

と語られ、更に斯る人の世に處する樣を說いては、

是の如き人は復た世樂に貪著せず、外道の經書手筆を好まず、亦復た喜つて

普賢の行

當詣道場

其の人及び諸の惡者の、若しは屠兒、若しは猪羊鷄狗を畜ふもの、若しは獵師、若しは女色を衒賣するものに親近せず。是の人は心意質直にして正憶念有り、福德力有らん。是の人は三毒に惱まされず、亦た嫉妒、我慢、邪慢、增上慢に惱まされず。是の人は少欲知足にして能く普賢の行を修せん。

とあり、なほ又

此人は久しからずして當に道場に詣して諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ法鼓を擊ち法螺を吹き法雨を雨ふらすべし。當に天人大衆の中の師子法座の上に坐すべし。

といひ、また

是の人復た衣服臥具飲食資生の物に貪著せず。所願虛しからずして亦た現世に於て其の福報を得ん。

といひ、極めて慇懃である。次には此の法華經を持つ者を輕んじ毀る者の受くべき報を多くあげ、

是故に普賢、若し是の經典を受持せん者を見ては、當に起て遠く迎ふべきこと當に佛を敬ふが如くすべし。

といふが其の收束の語である。而して、

佛是の經を說きたまふ時、普賢等の諸の菩薩、舍利弗等の諸の聲聞及び諸の天龍、人非人等の一切の大會、皆大に歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき。

といふを以て此經すなはち終る。

七　觀普賢菩薩行法經の梗概

勸發品の中に『是の人は少欲知足にして能く普賢の行を修せん』とある。其の普賢の行なるものは、詳かに此の普賢經の中に說かれてある。釋尊の毗舍離

滅後の衆生

國、大林精舍、重閣講堂に在して、諸の比丘に、今より三月の後に涅槃すべきことを告げたまふを其の發端とする。

是の時に尊者阿難、長老摩訶迦葉、及び彌勒菩薩の三人が座より起つて禮をなし、佛に向つて異口同音に、

世尊、如來の滅後に云何してか衆生、菩薩の心を起し大乘方等經典を修行し正念に一實の境界を思惟せん。云何してか無上菩薩の心を失はず、云何してか復た當に煩惱を斷ぜず、五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除することを得、父母所生の清淨の常の眼、五欲を斷ぜずして而も能く諸の障外の事を見ることを得べき。

と問ふ、佛は之に答へていひたまふに、

如來昔耆闍崛山及び餘の住處に於て、已に廣く一實の道を分別せしかども、今此處に於て未來世の諸の衆生等の、大乘無上の法を行ぜんと欲せん者、普賢の行を學し、普賢の行を行ぜんと欲せん者の爲に、我今當に其の所念の法を說くべし。

普賢の行

とある。卽ち前に法華經に於て示された所は、無上道の何たるかであつて、今より示されんとするは、如何にして之に達すべきかである。心の汚れたる者は佛菩薩を見ることが出來ぬ。佛菩薩を見得たるは、其の心の佛菩薩に近くなつて行く明證である。されば釋尊の敎は普賢を見ることから始まる。

見普賢

三昧に入らざれども但だ誦持するが故に、心を專にして修習し、心々相次いで大乘を離れざること一日より三七日に至れば、普賢を見ることを得。

とあり、なほ重い罪障のあるものは、なほ久しい間を經て後でなければならぬと種々の異ひが示されて、さて後に普賢菩薩の氣高い姿が詳かに說示されてある。

普賢の姿を見た行者は更に十方諸國土の菩薩を見んが爲に、更に修行を重ね

懺悔

なければならぬ。それは卽ち

晝夜六時に十方の佛を禮し、懺悔の法を行じ大乘經を讀み大乘經を誦し、大乘の義を思ひ大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬し供養し、一切の人を視ること猶ほ佛の想の如くし、諸の衆生に於て父母の想の如くせよ。

といふのである。斯くて普賢菩薩の眉間より白毫の光明を放つと共に、十方の菩薩が現はれて行者の請に應じて淸淨の大乘經法を說き、又偈を作つて行者を讚歎する。

其の時に行者更に心に大乘を念じて、晝夜に怠らぬ中に、夢に普賢菩薩の法を說くさまを見て深く悅びを覺える。

爾の時に行者、普賢の深法を說くことを聞いて、其の義趣を解し、憶持して忘れず、日々に是の如くにして其の心漸く利ならん。普賢菩薩其をして十方の諸佛を憶念せしめん。普賢の敎に隨て正心正憶にして、漸く心眼を以て東

見十方諸佛

方の佛の身黃金の色にして端嚴微妙なるを見奉り、一佛を見奉り已つて復た一佛を見奉らん。

と、斯くして初めて十方の一切の諸佛を見ることが出來る。しかし是だけではまだ却々足らぬ。

大乘に因るが故に大士を見ることを得、大士の力に因るが故に諸佛を見奉ることを得たり。諸佛を見奉ると雖も猶ほ未だ了々ならず。目を閉づれば則ち見、目を開けば則ち失ふ。

といふ有樣である。諸佛は常に世間に在すのに、之を常に見ることの出來ぬのは、身の罪の深い爲であると、深く懺悔する時には、普賢菩薩現はれて行住坐臥にも離れず、夢の中にも常に法を說く。それより過去の七佛の夢に現はれて敎を說きたまふに逢ふ。それよりして

普賢菩薩其の人の前に住して、敎へて宿世の一切の業緣を說き、黑惡の一切

諸佛現前三昧

の罪事を發露せしめ、諸の世尊に向ひ奉り、口に自ら發露す。既に發露し已れば尋いで時に卽ち諸佛現前三昧を得。

六根清淨

斯くして十方の諸佛を見て了々分明なることを得るのである。それより普賢菩薩は行者の爲に六根清淨懺悔の法を說き三七日に及ぶ。その結果として、諸佛現前三昧の力を以ての故に、普賢菩薩の說法莊嚴の故に、耳漸々に障外の聲を聞き、眼漸々に障外の事を見、鼻漸々に障外の香を聞かん。廣く說くこと妙法華經の如し。是の六根清淨を得已つて、身心歡喜して諸の惡想無からん。心是の法に純にして、法と相應ぜん。

大乘經典

といふやうになる。此に至つて又無量の諸佛現はれ、手を以て行者の頭を撫て之を讚めたまひて後、

我等先世に大乘を行ぜしが故に、今淸淨正遍知の身と成れり。汝今亦た當に勤修して懈らざるべし。此の大乘經典は諸佛の實藏なり、十方三世諸佛の眼目なり、三世の諸の如來を出生する種なり。此經を持つ者は卽ち佛身を持ち佛事を行ずるなり。當に知るべし、是の人は卽ち是れ諸佛の所使なり。諸佛世尊の衣に覆はれ奉る、諸佛如來の眞實の法の子なり。汝大乘を行じて法種を斷たざれ。今諦かに東方の諸佛を觀奉れ。

生菩薩法

と示され、やがて諸佛の姿を見る。それより更に大乘經典を誦して、釋迦牟尼佛と、分身の諸佛を見る。又自ら過去の世に於て諸佛の所に於て受持讀誦した所の大乘經典を明に憶ひ起す。又無量の菩薩が現はれて、異口同音に行者に六根を淸淨ならしむることを勸める。その言に、

或は說言有らん、汝當に佛を念ずべし。或は說言有らん、汝當に法を念ずべし。或は說言有らん、汝當に僧を念ずべし。或は說言有らん、汝當に戒を念ずべし。或は說言有らん、汝當に施を念ずべし。或は說言有らん、汝當に天を念ずべし。此の如き六法は是れ菩提心なり、菩薩を生ずる法なり。汝今當

眼根の懺悔

に諸佛の前に於て、先の罪を發露し、至誠に懺悔すべし。

とある。而して先づ眼根に就ての懺悔をすゝめるのである。

無量世に於て、眼根の因緣をもて諸色に貪著す。色に著するを以ての故に、諸塵を貪愛す。塵を愛するを以ての故に女人の身を受けて、世々に生ずる處諸色に惑著す。色汝が眼を壞つて恩愛の奴と爲る。故に色汝を使ひ三界を經歷せしむ。此の弊使を爲て盲にして見る所無し。今大乘方等經典を誦す、此經の中に十方の諸佛色身滅せずと說く。汝今見るを得つ、審實にして爾りや不や。眼根不善汝を傷害すること多し。我が語に隨順して諸佛、釋迦牟尼佛に歸向し奉り、汝が眼根の諸有の罪咎を說け。

此の心を以て懺悔し、五體を地に投じ、大乘を正念して心に忘れ捨てずしてあるを眼根を懺悔する法といふ。斯くて懺悔のかひが有つて、釋迦牟尼佛と分身諸佛とのみならず、又多寶佛も現はれて此の行者を讃められる。行者はその後

耳根の懺悔

更に普賢菩薩に向つて、なほ我が悔過を敎へ給へと請ふと、普賢菩薩乃ち耳根の過惡を說き示す。

汝多刼の中に於て、耳根の因緣をもて外の聲に隨逐して、妙なる音を聞く時は心に惑著を生じ、惡き聲を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す。此の如き惡耳の報惡事を得、恒に惡聲を聞いて諸の攀緣を生ず。顚倒して聽くが故に當に惡道、邊地邪見の法を聞かざる處に墮すべし。

之を聞いて更に懺悔を爲す時には、多寶佛の放ちたまふ大光明に依て、十方界を照し、善德佛及び其の分身諸佛共に行者を讃めたまふ。それより普賢菩薩はまた懺悔の法を說く。

鼻根の懺悔

汝先世無量刼の中に於て香を貪るを以ての故に、分別諸識處々に貪著して生死に墮落せり。汝今當に大乘の因を觀ずべし、大乘の因とは諸法實相なり。之を聞いて五體を地に投じて懺悔し、諸佛を禮拜供養し、自ら香味觸を貪るが

舌根の懺悔

爲に作つた凡ての罪を發露して懺悔し、また大乘の經典を誦する時には、空中に聲あつて、

法の子、汝今當に十方の佛に向ひ大乘の法を讃說し、諸佛の前に於て自ら己が過を說くべし。諸佛如來は是れ汝が慈父なり。汝當に自ら舌根の所作の不善惡業を說くべし。此の舌根は惡業の想に動ぜられて妄言綺語、惡口兩舌、誹謗妄語、邪見の語を讃歎し、無益の語を說く。是の如く衆多の諸の雜惡業鬪諍壞亂し、法を非法と說く。是の如き衆罪を今悉く懺悔すと。

身心懺悔

とある。之に從つて懺悔し終れば、東方の栴檀德佛及び分身の諸佛現はれ、續いて又空中に微妙の聲がある。

汝今當に身心懺悔すべし。身とは殺盜婬、心とは諸の不善を念ずる十惡業及び五無間を造ること猶ほ猿猴の如く、亦た臙膠の如し。處々に貪著して遍く一切六情根の中に至る。此の六根の業、枝條華葉悉く三界、二十五有、一切の生處に滿てり。亦た能く無明老死、十二の苦事を增長す。八邪八難、中に經ざること無し。汝今當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし。

大莊嚴懺悔

とある。此語を聞いて、行者が

我今何れの處にしてか懺悔の法を行ぜん。

と問ふに對して、また空中の聲は

釋迦牟尼佛をば毗盧遮那遍一切處と名け奉る。其の佛の住處を常寂光と名く。云々

と答へ、十方の佛は手を以て行者の頭を摩て、告げたまふに、

善哉善哉善男子、汝今大乘經を讀誦するが故に、十方の諸佛懺悔の法を說きたまふ。菩薩の所行は結使を斷ぜず、使海に住せず。心を觀ずるに心無し、顚倒の想より起る。此の如き相心は妄想より起る。空中の風の依止する處無きが如し。是の如きの法相は生ぜず沒せず。何者か是れ罪、何者か是れ福。

我が心自ら空なれば、罪福主無し。一切の法は是の如く、住無く壞無し。是の如く懺悔すれば、心を觀ずるに心無し。法、法の中に住せず。諸法は解脫なり、滅諦なり、寂靜なり。是の如き相をば大懺悔と名け、大莊嚴懺悔と名け、無罪相懺悔と名け、破壞心識と名く。此の懺悔を行ずる者は身心清淨にして法の中に住せざること、猶ほ流水の如し。念々の中に普賢菩薩及び十方の佛を見奉ることを得ん。

斯る諸佛の大悲の光明に照され、其の第一義を說きたまふを聞くによつて、行者はやがて菩薩の正位に入ることを得るのである。

釋尊は以上の懺悔の法を說き終つて、更に之を總括して阿難に告げたまふやう、

佛滅度の後、佛の諸の弟子、若し惡不善業を懺悔する有らば、但だ當に大乘經典を誦讀すべし。此の方等經は是れ諸佛の眼なり諸佛は是に因て五眼を具

することを得たまへり。佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法印にして涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の佛の淸淨の身を生ず。

更に偈を說いて、六根の作る罪を一々に述べ、大乘經典の力によつて之を除くべきことを敎へ、

無量の勝方便、實相を思ふに從て得。

といひ、なほ又

一切業障海は皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。是故に至心に六情根を懺悔すべし。

と告げたまふ。

尙ほ種々の場合をあげて、大乘經典を持つことに依て懺悔を果すべきことを懇ろに敎へられて、最後に世俗の人の實行し得べき懺悔の法を說かれる。卽ち

剎利居士懺悔の法

『剎利居士懺悔』の法である。その懺悔の法は五つある、先づ第一の懺悔とは、

但だ當に正心にして三寶を謗せず、出家を障へず、梵行人の爲に惡留難を作さゞるべし。當に繫念して六念の法を修すべし。亦た當に大乘を持つ者を供給し供養すべし。必ず禮拜す可し。當に甚深の經法、第一義空を憶念すべし。是の法を思ふ者、是を剎利居士の第一の懺悔を修すと名く。

といふのである。第二の懺悔とは、

父母に孝養し、師長を恭敬する、是を第二の懺悔の法を修すと名く。

とある。第三の懺悔は

正法をもて國を治め、人民を邪枉せず、是を第三の懺懺を修すと名く。

とある。第四の懺悔は

六齋日に於て諸の境內に敕して、力の及ぶ所の處に不殺を行ぜしむ。此の如き法を修する、是を第四の懺悔を修すと名く。

とある。第五の懺悔は、

但だ當に深く因果を信じ、一實の道を信じて、佛は滅したまはずと知るべし。是を第五の懺悔を修すと名く。

とある。而して其の收束の語として、

未來世に於て若し此の如き懺悔の法を修習すること有らん時は、當に知るべし此の人は慚愧の服を著、諸佛に護助せられ、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

とあり、釋尊の普賢行を說きたまふこと之を以て終る。

八　法華經の分段

法華經を信ずるといへば、勿論其の全體を信ずるのである。法華經の全體と自分の心とが一つになつて仕舞へば、それで最早いふ所は無い。よく分つて、

分段の必要

固く信じて後は、其の何れの部分を取つて見ても、そこに全體の精神が現はれて見えるに違ひ無い。段などを分けて見る必要は固より無い。しかし吾々凡夫が法華經を讀むのに、最初から左樣によく分つて、左樣に固く信ずるといふわけには行かぬ。乃ち之に順序を立て、區別をつけて見る必要が起る。人に逢ふには其の顏を見なければならぬ、手や足だけ見たのではいかぬ。何れが顏か、何れが頸か、何れが手足かを知る爲の分段である。

殊に法華經のやうに多くの重要な敎義を含んだ經は、解釋のしかたに依て種々の異つた思想が生み出されて來るから、深く意を用ゐなければならぬ。それで其の分段の當を得ると得ぬとは、解釋の上に大なる關係をもつものである。

本門と迹門

さて法華經を讀む上に大切な第一の別ちは本門と迹門との區別である。日蓮上人は

彼々の經々と法華經と、勝劣淺深、成佛、不成佛を判ぜん時、爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならず、何に況んや其以下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者共をや。——敎行證御書

といひ、又は

日本乃至一閻浮提一同に、本門の敎主釋尊を本尊とすべし。——報恩鈔

といふ樣に本門と迹門との間に輕重の別を立てゝ居られるのである。

法華經二十八品を二大分して、序品から安樂行品までの十四品を迹門とし、次の涌出品から終りの勸發品までの十四品を本門とする。而して迹門の中心となるものは方便品で、本門の中心となるものは壽量品である。

二經の肝心は迹門の方便品、本門の壽量品なり。天台妙樂の云く、迹門の正意は實相を顯はすに在り、本門の正意は壽の長遠を顯はす云々。——授職灌頂口傳鈔

とある如く、迹門の方では釋尊一代の說敎の歸旨を示すことが主となつて居

本迹の意義

て、餘程哲學的である。本門の方では釋尊御自身が無量の壽を具ふる所の本佛であることを示すのが主であつて、純ら信仰的である。迹とは足で歩んだ迹である、月の水に映る影である。迹がある以上は歩んだ人がなければならぬ、影が映つて居る以上は月その物がなければならぬ。現はれた事がある以上は、そこに現はれた力の本がなければならぬ。映つた影は水のある場所毎に何千萬でもあるが、本體の月は唯一つである。釋尊一代に說かれた敎が夥しいものであるのみならず、釋尊以前にも多くの佛があつて、それ〴〵に敎を說いて居られるのであるが、それ等は盡く萬水に映る一月の影である。壽量品には『常に此に住して法を說く』とあるが、たとへ無限の時の間に、如何に多くの佛が出て、如何に多くの種類の敎を說かれやうとも、悉く皆唯一なる本佛の常住の說法の一部分に外ならぬものである。而して其の無量の間に多くの敎が世に存在するわけは、之によつて世の人の心を種々樣々に整へ且導き、最後に究竟の敎を與

本佛と迹佛

本化と迹化

へる爲の準備を爲したに過ぎぬ。されば諸佛の出世は、畢竟釋尊の出らるゝ爲の準備、釋尊の四十餘年の說法は、また最後の法華經の爲の準備といふ關係である。而して此の釋尊の出世によつて本佛の具有せらるゝ力が初めて遺憾なく現はれたことである。卽ち釋尊は淨飯王の子と生れ、十九にして出家し、三十にして得道せられたといふが、實は本佛が人身を受けて現はれ給うたものと解さなければならぬのである。

此の本佛たる一つの月が現はれたる、萬水の影である所の諸佛はいづれも迹佛といふべきである。釋尊と雖も壽量品の示されぬ前だけでいへば、矢張迹佛に過ぎぬ。本佛の與へらるゝ敎化は本化であつて、迹佛の敎化は迹化である。法華經の中に於ても方便品を中心としたる前半の十四品は、釋尊一代の說法を統一するものではあるが、其の歸する所は諸法の實相を示すに在るといふのであつて、未だ本佛の久遠の生命に說き及ばぬ故に、之を迹門といふ。而して諸

法の實相といふも本佛の具有せらるゝ神通の力の現はれたものに外ならぬことを明にしたる後半は、之を本門と呼ぶのである。法華經以前の諸經と法華經とを相對すれば、彼の諸經に說かれた所は方便の敎であり、眞實の敎に導くべき權の敎である。法華經は眞實の敎である故に、こゝに權實の相對が認められなければならぬ。法華經その者の中に就て、また本迹の相對を認めなければならぬ。既に實敎が分つて後、更に顧みて權敎を見れば皆それ〳〵に大なる價値をもつものであるが、若し實敎を知らずして、權敎の何れかを至高絕對のものと認めるならば、それは誤れるの甚しきものである。法華經の中の本迹の關係も亦その如くである。

なほ法華經に限らず、何れの經を讀むのにでも、之を序分、正宗分、流通分の三つに分けて見ると、之を解するのに秩序が立つて頗る益が多い。此の三分の事は符秦の僧道安の始むる所である。(道安は秦の建元二十一年に七十二歲で

歿した、卽ち今より一千五百三十三年前に當る。)序分とは卽ち本論に入るまでの前提である。正宗分は說の中心を成す部分である。然るに佛の敎は衆生を濟ふのが目的である故に、之を後の世に汎く弘まらせなければならぬ。その爲に經の終りに此經の功德をのべて、之を後世に流通すべきことを囑せられるので、之を流通分といふ。天台大師は法華經全體を三段に分け、又本迹二門を分けて後その各を三段に分けた。卽ち次の如くである。全體を三分するのを『一經三段』といひ、本迹二門の三段を合せて『二經六段』と名けてある。

一經三段
- 序分
  - 序品……一品
- 正宗分
  - 方便品　譬諭品　信解品　藥艸品　授記品　化城品
  - 五百品　人記品　法師品　寶塔品　提婆品　勸持品
  - 安樂品　涌出品　壽量品　分別品半品……十五品半
- 流通分
  - 分別品半品　隨喜品　功德品　不輕品　神力品　屬

累品　藥王品　妙音品　普門品　陀羅尼品　嚴王品
勸發品……十一品半

方便品と壽量品とは共に正宗分の中に含まれる。卽ち二乘作佛も、久遠實成も共に此の中にある。

迹經三段
- 序分——序品……一品
- 正宗分——方便品　譬諭品　信解品　藥艸品　授記品　化城品　五百品　人記品……八品
- 流通分——法師品　寶塔品　提婆品　勸持品　安樂品……五品

本經三段
- 序分——涌出品前半……半品
- 正宗分——涌出品後半　壽量品　分別品前半……一品二半
- 流通分——分別品後半　隨喜品　功德品　不輕品　神力品　屬累品　藥王品　妙音品　普門品　陀羅尼品　嚴王品

二經六段

勸發品……十一品半

斯く本迹二門に分れば、二乘作佛は迹門の正宗分に含まれ、久遠實成は本門の正宗分に於て明され、前者は權敎に對して實敎の貴いことを示す、所謂開權顯實を主とし、後者は迹門に對して本門の貴いことを現はす、所謂開迹顯本を主とすることが一目にして明瞭である。日蓮上人は更に二種の三段を述べられた。卽ち釋尊一代の三段と、末法の世に於ける此經の流布に就ての三段とである。之を前のと併せ稱して五重の三段といふのである。

一代三段
- 序分——法華以前の凡ての經々
- 正宗分——法華
- 流通分——涅槃（これは最後に說かれた經で、あるこの事は後に詳し。）

本法三段
- 序分——三世十方微塵の經々
- 正宗分——壽量品文底五字

―流通分――本化菩薩出現化導

文底の五字とは卽ち妙法蓮華經の五字である。諸佛の說き示された凡ての經々の趣意は要するに此の五字に歸着する故に、此の五字を弘めるのは卽ち諸佛出世の本懷を滿す所以なのである。

いふ迄も無く宗敎は理論を主とするものでは無い、敎義が如何に高尙であつても、實行の上に現はれなければ宗敎としての價値は乏しい。しかし實行するといふ以上は、如何なる障碍にも打克て實行しなければならぬ。外に對しては如何なる誘惑にも、また如何なる迫害にも克たなければならぬ。內に對しては如何なる疑惑にも打克たなければならぬ。疑惑の高まり來るのに對して『兎も角も信じて見やう』といふやうな、淺はかな妥協の出來得るものでは無い。されば理論の上に於ても確とした根柢をもつものでなければ、宗敎として充分の權威をもつことは出來ぬのである。而して經の中に示された所は、佛が諸の

依法不依人

弟子に對して直接に敎へられた所である。其の弟子たる者は、いづれも充分の修行を積んで、一を聽いて萬を覺る力のある人々である。故に末代の吾々凡夫に對しては、其の意あまりに深く、其の旨あまりに微にして、直ちに經の中の語によつて吾々の日常に有する疑問を解くといふことは困難である。是れ卽ち多くの論釋の作られたる所以である。しかし論釋を作る人は何れも佛よりは下つた人々であるから、其のいふ所必ずしも盡く當れりとは定め難い。されば如何に智者學匠の聞えの高い人でも、その言が佛の說かれた所と明に矛盾するやうなものには、斷じて從ふべきで無い。それを思ひ誤つて、信仰上に錯亂を來す時は取返しのつかぬ事になる。故に涅槃經の中に『法に依つて人に依らざれ』と警め置かれたのである。

天台大師や傳敎大師は法華經の眞の精神を捉へ得た人々である故に、言語文字の末に拘はらないで、その言語文字の底に藏されたる深義を顯はすことに力

天台、傳教の二師

を用ゐられた。例へば『一念三千』といふことは法華經の中の何處にも無いけれども、日蓮上人が

佛になる道は華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も實には叶ふべしとも見えず。但だ天台の一念三千こそ佛になる道と見ゆれ。

——開目鈔

といひ、若くはまた

一念三千の出處は略開三の十如實相なれども、義分は本門に限る。——十章鈔

と云はれた如く、法華經本門の精神を發揮したるものである。但し經の中にも明に示されたやうに、此の教への遍く弘まるべきは末法の世である故に、天台大師や傳教大師の時はまだ其の時機に達して居ないのである。故に二師は後に之を遍く世に弘める爲の基礎を作ることに力を用ゐ、理論的の攻究を努めた。その中にも又程度の差がある。傳教大師は天台大師よりは二百餘年の後に出て、末法の世にも餘程近づいて居るのみならず、教義の基礎は已に、天台によつて定められてある故に、その力を用ゐた所は彼よりも餘程實際的になつて居る。叡山に戒壇を建立しやうと計畫したといふ一事によつても、其の態度を知るべきである。日蓮上人となると、已に末法の初めに當つて、廣宣流布の時期に入つて居るといふ確信があるから、全く實際的になつて居る。されば其の說かれた所、記された所は天台傳教二師に比べて、別箇の面目を發揮したものである。彼は精しくして整ふを主とし、此は簡にして要を得ることを主とする。彼の重んずる所は嚴密なるに在り、此の重んずる所は切實なのに在る。彼は博く、此は深い。彼は完く、此は力がある。法華經が如何に深い哲理を含むかを知らうとならば、天台傳教の二大師に就て之を學ぶが宜い。法華經の精神が吾々の實行上に如何に力あるものとして現はるべきかを知るには、日蓮上人に就くより外は無い。

日蓮上人の特色

九　法華經の色讀

苦樂と信仰

法華經を信ずるによつて、苦惱に充ちた娑婆世界が常寂光土に變じ得るといふのは、其の苦を忘れるとか、若くは紛れるとかいふ事では無い。日蓮上人が

苦をば苦と覺り、樂をば樂とひらき、苦樂共に思合せて南無妙法蓮華經と打唱へ居させ給へ。――四條金吾御返事

と示された如く、苦樂を苦樂と明に觀じて、而も之が爲に擾されず、其の苦の中にも樂の中にも、更に深い悅びを見出して行くのである。それは吾が心に佛の偉大なる力が常に通つて居る故に出來るのである。但し吾と佛と元來關係の無かつたものが、信仰によつて新しく斯る關係を作つたといふのでは無い。元來吾と佛と相隔てぬものであるのに、全く自覺せずして吾から隔てを作つて居たのを、本來の關係に引戻すのである。卽ち上人が

佛と吾等

釋尊と我等とは本地一體不二の身也、釋尊と法華經と我等との三は全體不思議の一法にして三の差別無き也。されば日蓮等の類竝に弟子檀那、南無妙法蓮華經と唱ふる程の者は久遠實成の本眷屬妙也。――授職灌頂口傳鈔

と申された所以である。吾々と釋尊との間に差別が無いといふは、あまりに自らを高く思ひすぎて、佛に對して不遜の甚しきものである如く見えるが、『我本と誓願を立て、一切の衆をして我が如く等くして異ること無からしめんと欲しき』といふ佛の慈悲に感激したものは、是非とも斯る自覺に達しなければならぬ筈である。但し佛と差別が無いといふは吾々人類の本來の性質に就て云つたことで、譬へば鑛山から掘り出して來た鑛石を指して、これも指輪の金も同じ金であるといふが如きものである。而して之を指輪の金にするのには、精錬し鍛冶する爲に、多くの力を用ゐなければならぬ。其の爲に如何程骨が折れやうとも、確に黃金が得られるといふ見込みがあれば、更に厭ひは無いわけであ

人の本性

る、提婆品に『情に妙法を存するが故に、身心懈倦無かりき』とあるのは、いかにも道理と思はれる。

三千年のむかし釋尊が菩提樹の下で成道を得られた時に感ぜられた悦びも、六百年のむかし日蓮上人が自ら法華經の弘通に魁すべき任を負うて生れたといふ確信を得て、感ぜられた悦びも同じ悦びであつたに違ひない。今吾々も信仰に怠り無くして久しきを經れば、また同じ悦びを感じ得る時があるに違ひないのである。世間は如何に變化しやうとも、人が人として具有する性質は千萬年を通じて不變のものでなければならぬ。吾々は三千年前にホーマアの作つた詩を讀んで、今でもアキリウスの義勇に感じ、二千年前に作られた楚辭を讀んで、今でも屈原の不遇を哀む。二千年三千年のむかしの人も今の吾々と同じ情をもつて居た故に、今の吾々の心に斯る感動を與へるのである。今より何千年の後も亦同じく斯の如くであるに違ひない。されば吾々は此の不變なるものゝ

上に自分の立場を定めて、吾々の周圍に起る無限の變化に應ずべき覺悟を固めなければならぬ。車の輪は廻るが其の輪の軸は動かぬ。輪の廻るのを最も速にしやうと思へば、軸を最も堅固に、少しも搖がぬやうにして置かなければならぬ。信仰は閑人の翫ぶべきものでは無い、盛に活動する人の爲に活力の源泉たるべきものである。

忙しくて研究の暇が無いといふことは、決して信仰無くして世を送る人の辨解とはならぬ。如何に航海を急いでも、磁石を見ずに勝手な方角に船を進めて宜いといふ筈はあるまい。暇の有る無しは問題で無い、要するに心の用ゐ方一つである。一室に靜坐して想を凝すことによつて得る所も必ずあるであらうが、死生の間に出入して得る所もあるであらう、劇しい業務を處理して行く間に得る所も亦なければならぬ。苟も人が全力を注いで爲す業は、いづれも貴むべきものである。若し其の人の心に潜んで居た佛種が芽を出しかけてゐるなら

法華經の行者としての日蓮上人

ば、之を長養し繁茂せしむる爲の日の光りや、清い空氣や、澄んだ水は閑裏にもまた忙裏にも共に見出されなければならぬ。信仰は空想で無い、活きたる力である。此の力は實生活上の活きたる問題の解決に試みられて、益々發達し完備し來るべきものである。博く學び多く聞くことは必ずしも信念を增進せしむる所以では無い。日蓮上人が

萬里を渡て宋に入らずとも、三箇年を經て靈山にいたらずとも、龍樹の如く龍宮に入らずとも、無著菩薩の如く彌勒菩薩にあはずとも、二所三會に値はずとも、一代の勝劣は知れるなるべし。――開目鈔

と自ら許されたのはまことに其の謂あることである。

法華經に就ての理論の上からの研究は、已に天台あり、續いて其の高弟たる章安あり、下つては妙樂あり、日本には傳敎あり、其の精を盡し微を極めたといふべきである。されば日蓮上人は『日蓮が法華經の智解は天台傳敎には千萬が一分も及ぶこと無けれども』と自ら卑下せられたのである。しかし『難を忍び慈悲のすぐれたること』に於て之に超ゆることを自ら許して居られる、こゝに上人の特色が存するのである。法華經が最勝の經たること、法華經の中に示されたる所が眞實の敎であることを、言語文字のみを以て證するのは、舊い時代の事である。その世界に流布すべき時と定まつた末法の世に於ては、是非とも之を事實によつて證せなければならぬ。若しその經の中に豫言せられてある事が、たとへ一つでも事實となつて現はれぬならば、最勝の經たる眞價は直ちに失はれてしまふ。然るに其の豫言中で殊に著しいものは、末法に出て此の敎へを弘めんとする者に對して、世間より加へらるゝ迫害である。迫害が無ければ法華經の行者とはいはれぬ、法華經の行者でなければ末法に之を弘むべき資格が無い。難にあふ毎に悅びを增すと申されたのは、法華經の行者たる日蓮上人として固より當然の語である。

其の自任した所

如何なる大事も、其の初めは一人の努力から端を發するものである。其の『一人』が卽ち我自身であると自覺した時に、わが責の重くして且大なることを、深く思ひ知るべきである。

涅槃經に云く、一切衆生受二異苦一、悉是如來一人苦等云云。日蓮云く、一切衆生の一切の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。――諫曉八幡鈔

とあるは決して誇張の言では無い。此の覺悟無くして三十年の奮鬪の出來やうわけはない。佛道に志された時から、三十二歳にして立宗の曉まで、一切經中の何れに釋尊の本意が示されてあるかを知らんが爲に研鑽を重ねて、終にそれは法華經以外に求むべからざることを確信せられたのであるが、此の確信は更に重大なる責任の觀念を伴ふものであつた。『釋尊は法華經を說かんが爲に世に出たまうたのである』と信ずる上は、『之によつて一切衆生に佛身を成ぜしめんことを志とせられた』といふことを信じなければならぬ。而も又之と同時に『その旨とする所は末世の衆生をして佛身を成ぜしむるに在る』ことをも信じなければならぬ。なほ又『地涌の菩薩が末世にまた出現して之を弘むべきことに定められてある』ことも固より信じなければならぬ。然るに時は既に其の閻浮提に流布すべき末法の世に入つて居ながら、之を弘通すべき人とては一人も見えぬ。天台の正系を傳へた筈の叡山が全く其の本意を失つてから既に四百年である。此儘にして過ぐるならば、法華經の中の豫言は虛妄となつてしまはなければならぬ。斯く考へ來つて、日蓮上人なる者いかで安閑として居ることが出來やう。

地涌菩薩と末世

地涌菩薩たる自覺

法華經を讀まなかつたむかしならば知らず、既に法華經を讀み、法華經を信じ、その末法の世に流布すべきことを知り、而も其の流布の端を開いた者の世に未だ現はれぬことを知る上は、『我より外に此の大任を果すもの無し』と思ひ立たずに止むことは、どうしても出來ぬわけである。若し末法に於て法華經を

信ずる唯一人々る自分が、之が弘通を以て己が任とせぬならば、法華經の中の『後五百歳中廣宣流布』の豫言は空となり釋尊は妄語の人となり終るであらう。一切衆生を悉く吾が子として、之が爲に法華經を說かれた釋尊の慈悲に感激しながら、自分の努力を惜む爲に釋尊を妄語の人にしてしまつて、それで濟むものであらうか。さりながら地涌の菩薩に托せられたる法華經弘通の大任が、果して我が身の肩にかゝつて居るか否かを確めずして、兎も角も弘通をはじめるといふのは心許ない至である。靈鷲山に集つて居た大衆の中には、然るべき菩薩達もあつたのに、釋尊は特に地涌の菩薩を召出して之が弘通を命ぜられた。此の任務は斯の如く重いものである。此の重い任務が果して自分に果し得られやうかと思へば、頗る心許なくも感ぜられる次第である。

しかし何時まで考へて居たとて、我が身にその力の具はつて居るか否かを確むべき機會は來ぬ。自ら進んで身を以て之を試みるより外は無い。法華經弘通の魁を爲すものに多くの敵があつて、種々の迫害を加へるといふことであれば、先づ自ら進んで之を弘めて、敵人の有無を試みるのが第一である。若し敵人群り起るならば吾が弘通の大任を負へる者たることは明である。吾に其の大任の負はされてあることが明であれば廣宣流布の端が我一人より開かるべきことも亦明である。さては敵人の加はる毎に、自らの確信も加はるべきである。此の決心が定まつたればこそ、日蓮上人は建長五年四月二十八日の曉天に、其の題目の第一聲をさし上る日に向つて發せられたのである。されば其の同じ日に直に迫害が起つて、清澄山を追はれることになつたのは、上人に取つては『末法の弘通に魁する者は我なり』といふ自信を固うすべき第一の機會であつたのである。爾來三十年間上人の生涯は、盡く法華經の中に示された豫言の實現である。伊豆に流されては、

是程の卑賤無智無戒の者の、二千餘年已前に說かれて候法華經の文に載せら

れて、留難にあふべしと佛記し置かれ參らせて候事のうれしさ申盡し難く候。――四恩鈔

と悅び、佐渡に流されては、

既に經文の如く、惡口罵詈、刀杖瓦礫、數々見擯出と說かれて、かゝる目に値ひ候こそ法華經をよむにて候らめと、いよいよ信心も起り、後生もたのもしく候。――佐渡御勘氣鈔

と悅び、身延の山に籠つては、

日蓮末法に出ずば佛は大妄語の人、多寶十方の諸佛は大虛妄の證明なり。佛滅後二千二百二十餘年が間、一閻浮提の內に佛の御言を助けたる人但日蓮一人なり。――聖人御難事

と悅び、御自身の上に起り來る一々の出來事によつて、佛語の虛しからざるを確め、法華經の廣宣流布の時の必ず來るべきことを確められたのである。

されば上人が法華經を讀むと申されるのは、其の文字を讀むのでは無く、その精神を身に體し、行住坐臥の間に之を實現し發揮して行くの謂である。

法華經を餘人の讀み候は、口ばかり言ばかりは讀めども心はよまず、心はよめども身によまず。――土籠御書

とある如く、眞に讀むといふ者は少い。心に信じ身に行うてこそ眞に讀む者といふべきで、之を色讀といふのである。法華經を色讀する人が一人多くなれば、此の國が一歩だけ寂光淨土に近づいたわけである。

法華經を行ずる日蓮等が弟子檀那の住所は、いかなる山野なりとも靈鷲山なり。――日向記

といふ自信のあるのは當然の事である。斯る實行の間に自然と出來上つたものが、日蓮上人の敎義であるから、哲學者が書齋に引籠つて作り上げた哲學の體系とは其の性質が全く異ふ。上人の口と筆とに上つた所は大事となく小事とな

く、悉く之を身に體して實行せられた事である。其の將來に就て下された豫想も、空に頭の中で構へ出されたもので無く、法華經の敎へと、御自身に實行された事實とを基礎として、動し難き確信を以て斷言せられたものである。故に其の敎義を一通り理解するだけでは、格別意味深くも思はれぬけれども、之を深く心に止めて、吾々が日々の生活の上に些かづゝなりとも實行してゆくやうにすれば、其の意の愈々深く、其の功の愈々切なるを知り得べきである。獨り法華經のみならず、上人の敎へも亦之を色讀することに努めなければならぬ。

傳敎大師の語

一〇　法華經と近世文明　上

傳敎大師が法華經の流布すべき時を考へて、『人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり』といひ、また『正像稍過ぎ已つて末法太だ近きにあり。法華一乘の機、今正しく是れ其時なり。』といはれたのを、日蓮上人が判じて、

大師の時代

此の釋は語美しく心隱れたり、讀まん人之を解し難きか。傳敎大師の語は我が時に似て、心は末法を樂ひ給ふ也。――曾谷入道殿許御書

と記されたのは、眞に大師の意を得たものと思はれる。天台大師の學說を記述して、本邦に於て法華經の眞の意義を初めて發揮せられた大師の功績はいふ迄も無く偉大であるが、惜しいかな時がなほ至らなかつた。說く方の力が如何に優れて居ても、聽く方の人に其の覺悟が充分に無ければ、深く强い印象を與へることが出來ぬ。されば一時は之に服しても、時を經るに隨て其の印象が薄くなるから、心はまた他の敎へに惑かれて移る。大師の滅後久しからずして、天台の正意は全く失はれ、世を擧つて眞言の信者となつてしまつたのは、大師の力の足らなかつた爲でも無く、弘法の力の更に偉大であつた爲でも無い。全くその時の未だ至らなかつた爲である。眞に此の最勝の法の弘まるべきと定めら

末法の世相

れた末法の世に出て、經の中に示されたやうな種々の迫害に堪へ、艱難を冒して法を弘めるのが、法華の行者たる者の本懷でなければならぬ。

淺は易く深は難しとは釋迦の所判なり、淺を去て深に就くは丈夫の心なり。——法華秀句

といふ語に照して考へて見れば、傳敎大師は自ら末法の世に出ず、五濁の生、鬪諍の時に遇はれなかつたことを殘念に思はれたに相違ない。

末法の世の姿は日蓮上人の時よりも、六百年後の今日に於て最も著しく現はれて居る。しかし世の中が如何に切迫して來やうとも、吾々は斷じて希望を失つてはならぬ。世の中の苦しくなつて來たのは卽ち法華經流布の時の迫つて來たことを示すものである。吾々は爲すべき事の多いのに驚いてはならぬ、たゞ自ら之に當るべき力の足らぬことを憂ふべきである。吾々は打克つべき困難の多いのを覺悟して、勇ましく之に打克つべき覺悟を定むべきである。若し吾々

の前に爲すべき何物も無く、打克つべき何事も無いならば、吾々の生涯は如何に寂寞たるものであらう。吾々の努力次第で、寂光の都を此の世に打建てることも出來ると考へれば、五濁の生も鬪諍の時も更に恐るゝに足らぬ。その苦しい中に大なる希望の光が輝いて居ることを認めなければならぬ。

神武天皇御東征の時の詔を拜するに、吾が建國の理想はまことに宏大なものである。都を大和に定めらるべきことを示されて、

彼の地必ず以て天業を恢弘し、天下に光宅するに足らん。蓋し六合の中心か。

と仰せられ、なほ又

上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後に六合を兼て都を開き、八紘を掩て而して宇と爲すも亦可ならずや。——日本書紀

無事平穩の禍

と仰せられた、此の莊嚴雄大な理想は吾々日本人たる者の共に永く承繼して行かなければならぬものである。吾々の祖先が此の建國の大事業に與つた時には、必ず共に斯る宏大な理想と剛健な思想とをもつて居たものであらうと思はれる。然るに其の後歲月を經ること漸く久しきに及んで、其の當時の意氣抱負も漸くに銷磨し、六合の中心を爲すなどゝいふ思想は殆んど全く影を潛めてしまつた。それには種々の原因もあらうが、此の三千年近くの間、烈しい外國の壓迫も無く、比較的平穩無事に過し得られたといふことが、幸福なやうであつて實は不幸であつたと考へられる。孟子の中に

天將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓やし、其の身を空乏にし、行其の爲す所に拂亂す。心を動かし性を忍び其の能くせざる所を曾益する所以なり。人恒に過て然る後に能く改む。心に困し慮に衡し、而る後作る。色に徵し聲に發し、而る後

外國との關係

喻る。入ては則ち法家拂士無く、出ては則ち敵國外患無ければ、國恒に亡ぶ。然る後憂患に生じて安樂に死するを知る也。――告子章句下

とあるのは誠に道理ある語である。然るに吾が國の既往は此の憂患といふものが殆んど無かつた。

先づ上古から奈良平安の朝までは、主として支那朝鮮の文明を輸入することを務めた時代で、未だ外國と相對立して競爭を續けるといふ機會には出逢はなかつた。其の間に朝鮮問題の爲に唐と衝突をしたことはあるが、間も無く和議が出來て本邦から盛に留學生を彼に送るやうになつた。其の後久しく外國との交渉も無く、鎌倉時代に宋との交通がまた開けたが、これもたゞ彼の文物を輸入するといふに過ぎぬことであつた。それに續いて蒙古の來襲があつたが、これも弘安四年閏七月の颶風で彼の艦隊が殆んど全滅したので結局となつた。その後足利時代に明との交通は開けたが、固より彼との間に何等の競爭も無かつ

維新以後の四十年間

たことである。豐臣太閤は朝鮮から進んで明を征服する計畫であつたが、志を遂げずに死んで、其の後を承けた德川氏は飽く迄平和主義であつた。又西洋諸國との交通も足利時代の末期に開けたけれども、未だ却々競爭などをやる程の關係にはならなかつた。其の內に德川時代となつて殆んど鎖國の狀態となつてしまつた。斯樣の有樣であるから、日本國民は有形の事にも、乃至は無形の事にも外國と烈しい競爭をして自分の力を鍛へ自分の覺悟を固めるといふ機會に殆んど出逢はなかつたのである。

德川時代の末に、世界各國との交通が初めて開けたのであるが、是は我から交通を開いたのでは無く、いはゞ無理やりに開かせられたに過ぎぬものである。されば日本國民は何等の準備も無く、何等の覺悟も無く、勿論何等の抱負も無く、卒然として列强對峙の中へ引出され、たゞ茫然として近世文明の絢爛を極めたるに相對し、たゞ眼が昏んで分別も何も付かなくなつて仕舞つたのである。斯の如き有樣であるから、明治時代に入つて西洋諸國との接觸が漸く密になると共に、一から十まで模倣主義となり、たゞ西洋文明の模倣にさへ成功すれば、それで國運の發展も、國力の增進も共に出來得べきものゝ如く心得るやうになつたのは、固より怪むに足らぬ事である。勿論其の間には西洋文明の輸入に一も二も無く反對して、國粹の保存を絕叫した彼の熊本の神風連の如き者もあるが、是は西洋文明の本質を究めて後に之を有害と斷ずるのでは無く、たゞ感情の上から之を排斥したのであるから、其の主張に深い根據も無く、一般の潮流を支へるだけの力は勿論無かつた。斯くして日露戰爭の頃まで凡そ四十年の間は、世界列强に對峙しやうの、競爭しやうのといふ覺悟は殆んど無く、たゞ西洋文明の模倣を事として過ぎ來つたのである。又西洋諸國の國民も吾々日本國民が彼等と對抗するやうにならうなどゝは夢にも想はなかつたのであるから、固より吾々を競爭の敵手と見做さうわけも無く、たゞ愛すべく親し

競爭の時代に入る

むべく憐むべき島國人として吾々に對し來つた樣子である。

今日では世界各國との關係も以前とは異り、各國共に吾々を一の恐るべき競爭者と見做して、政事上、經濟上、學問上、凡ての方面に於て遠慮なく吾々と競爭を試みることになつて居る、卽ち、以前のやうな了簡では到底立行かぬ時代となつたのである。日蓮上人の時には蒙古が來襲したので所謂『他國侵逼の難』が現はれたものと爲し、末世の相の實現されたものとして、上人は之を法華經流布の瑞相と稱し、前にあげた傳敎大師の語を引いて、

此の釋に鬪諍の時と云々。今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指す也。此時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士となり、一閻浮提第一の本尊此國に立つべし。月支震旦未だ此の本尊ましまさず。――觀心本尊鈔

と記されたが、今の時代の困難は却々その頃のやうなものでは無い。今は旗を立て戟を列ねて吾が國に攻め寄せる國は無いが、財力と智力とを以て吾を壓迫し吾を威赫し、政治上、經濟上、學問上の戰ひに於て吾に大打擊を加へんとするものは各國皆盡く然りといふ有樣である。然るに斯樣な烈しい競爭の中で揉まれた經驗の無い日本國民は、之に應ずべき覺悟を缺いて居るのである。隨て今日以後に於ける大競爭に於ては、非常なる困苦に出逢ひ、非常なる窮境に立たなければならぬであらうと思はれる。しかし苦まずに偉大な業を成すといふことは到底出來ぬものであるから、吾々は勇ましく此の窮地を突破して行く決心をするより外はない。鐵が火の中で鍛へられて名劍となるやうに、斯る窮地に於て鍛へられて、彼の建國の詔に示されたる理想を其の身に體し得る國民が初めて出來上ることであらう。

今後の窮境

信仰の必要

眞の信仰は斯る必死の場合に迫つて、初めて國民各個の心の底に發生し且成育し來るべきものである。深く自ら反省する力の無いものに、眞の信仰の貴さが分らう筈は無い。而して此の痛切なる反省は、泰平無事に世を暮して來た者

に到底望まるべきものでは無い。大なる壓迫も無く、強い刺激も受けず、狹い天地の間に徐に動いて居ればそれで濟むといふやうな時代には、何事もたゞ昔からの型に從つて、人のする通りを眞似て居れば宜いのであるから、大なる野心を懷く者も無く、大なる不平を感ずる者も無い。つまり善人らしい善人も無く、惡人らしい惡人も無く、格別面白い事も無いかはりに格別困難な事も無いといふ體である。然るに世が次第に切迫して來て萬事が複雜になり面倒になり、內には生存競爭が烈しくなり、外からは種々な壓迫が加はるといふやうになると、誰の心にも强い刺激が與へられ、隨て種々の慾望も增長して來るから、平和とか滿足とかいふことは決して望まれぬやうになる。而も其の慾望の增長には際限が無いけれども、慾望を充すべき物にはいつも限りがある。玆に於て自分の慾望を滿足させる爲に、如何なる方法手段をも擇まぬといふことになり、恐ろしい爭鬪の端が開かれる。これは個人と個人との間にも、團體と團體の間

にも乃至は國民と國民との間にも共に生じ來る現象であつて、『五濁の生、鬪諍の時』といふのに少しも間違ひはない。而も斯る時代は決して悲觀すべき時代で無く、法華經流布の光明は實に斯る闇の底に動いて居るのである。

哲人カントは『感激無ければ大業無し』と云つた。大に喜ぶことも無く、大に悲しむことも無く、深くも思はず强くも感ぜぬ人の生活は夢の如きものである。たとへ多少の善い事をしたにしても、固よりいふに足らぬものである。末世に及んで人の心が險しくなり、淺ましい事の數々が社會に現はれて來たところを見ると、前途極めて黯澹たるやうにも思はれるが、人々が其の心の力と身の力とを盡く傾けて事に當つて居るといふのは、甚だ賴もしい事といはなければならぬ。勿論今の世の中に着實なる努力をせずして幸運を覬つて居る者、眼前の成功を求めんが爲に小い權謀術數を弄する者の數は頗る多いことであるが、此等の人とても其の心は決して閑で無いのである。彼の『さくらかざしてけふ

本邦と世界各國

も暮しつ』と詠じた平安朝の頃の人や、『花見る人の長刀』とよまれた元祿頃の人のやうな長閑な氣分では決して居ないのである。たとへ其の身は閑でも、其の手は怠つて居ても、其の心を惱まし氣を勞することは非常なものである。概觀すれば今の時代は忙しく烈しい時代である。人々が心を勞し身を勞して、目覺しい競爭を續けてゐる有樣は歷史上に曾てその例を見ない、實に華々しい光景である。

尤も本邦は久しく世界の競爭の外に立つて居て、近頃その仲間入りをしたのであるから、譬へば靜であつた池の堤が切れて、遽かに急流の水が注ぎ込んだやうなもので、其の混亂は非常なものである。西洋諸國は六百年來隨分烈しい競爭を續けて來て、各國共に相應な鍛錬も出來、覺悟もついて居ることであるから、吾々のやうに慌て騷ぐことも無い樣子である。しかし如何に覺悟がついて居るにしても、其の競爭の波は日に日に高まつて來るのみであるから、何れの國でも少しも安穩といふことは無い。各國民の氣分は月に日に緊張して來るのみである。但し今は戰時であるから特別であるが、たとへ此の戰爭の濟んだ後でも、平和安靜の時代などの到來すべき見込みは先以て無いものと思はなければならぬ。卽ち『五濁の生鬪諍の時』といふ語は、獨り吾が國のみならず、世界の凡ての國に宛て嵌まるべき語なのである。

近世人の生活

近世歐羅巴の文明は實に華々しいものである。彼の希臘の全盛時代、若くは羅馬の全盛時代も到底比べものにならぬ程に華々しいものである。最近百年許の間に世に公にせられた新發明新發見の數だけでも實に夥しいもので、それが一々皆實際上に應用せられ、國民の生活を便利にし安全にし、趣味多からしむる爲に盡く役立つてゐる。實に百年前の人々に比べると、今の文明國人は全く別の天地に住んで居ると云つても宜い程である。それにも拘らず、彼等は更に滿足を感ぜず、彼等の心は平和に向はず、不平の聲や苦悶の叫びは日に高まり

來るのみである。薄暗いランプの下に踞つて居た人が、晝よりも明るい電燈の下に座を占め、疲れた馬にガタ馬車を牽かせて旅行した人が、一時間六十哩も走る汽車に乘るやうになつて、其の生活は確かに華美になり又便利になつたが、決して幸福になつたといふことは出來ぬ。此の分で何處まで進んでも、眞の幸福には到達し得られぬ、否却て幸福の途より遠ざかるのみであるといふ考へから、近世文明に根本的の改革を加へなければならぬと主張した思想家も少くは無い。例へばハルトマンとか、トルストイとかいふ人々は皆それである。しかし此等の人々の主張するやうに、今の社會組織をスッカリ立て直すといふことは到底實行し得べからざる事である。又近世文明が根本から間違つたものであるといふ觀察も、極端に過ぐるものである。たとへ其の中に幾百千の弊害を含んで居やうとも、近世文明は多くの偉大なる人物の貴むべき努力の成果を併せて含むものである。之を一概に排斥することの出來やう筈はない。吾々は

少しく遡つて此の近世文明の成立ちを考察し、それが法華經の流布に如何なる關係をもつかを研究して見なければならぬ。

一一　法華經と近世文明　中

近世の歐洲人は種々の方面に其の力を揮つたが、就中吾々の眼を駭かしたことは、其の自然界に就て精密な研究を積んだこと、其の有らゆる自然の力を征服し又利用して、自分達の生活狀態を向上進歩せしめたことである。

文明とは要するに自然に對する吾々の勝利の連續に外ならず。――モーセス、ハナヴキー

といふは簡にしてよく之を悉した語である。此處に近世人の長處も存し、また其の弊處も存するものである。勿論これは近世に至て初めて現はれた特色といふわけでは無く、古代思想の復活と稱するも不可なきものである。

古代希臘人

古代希臘の人は豐富な想像力と精緻な辨別力とを兼ね具へ、頗る活動的な本性を有したる國民であつた。而も其の地勢に於ても、其の風土に於ても彼等の活動に最も便りの多い土地に其の國を立てた。されば彼等は盛に究め盛に動き、深く知り強く感じ、實に華々しい生活の仕方をした。自然界の種々の祕密を開き、今まで人の生活に妨げとなつた種々の自然力を、人の生活に便を與へるやうに變化せしめ、此の天地間を盡く人の領分にしてしまふことは、彼等の最も得意とする所であつた。近世科學の萠芽ともいふべきものは、盡く希臘時代に存して居たと云つても決して不當では無い。人が自然界に力を伸すことを知らず、自分達の間でのみ勢力を爭つて居る時には、極めて狹い差別的の思想のみが強くなつて、雄大の氣風とか寬濶の氣象とかいふものは全く見られぬやうになる。希臘人のやうに自ら此の天地間を支配し得べき力のあることを信ずる者は、其の地位身分の如何を問はず、誰も共に『人としての貴さ』を具へたものであることを知る故に、互ひに自ら敬すると共に又他の者を敬し、互ひに人として尊重しあふ習はしが、自ら其の間に發達するものである。人格の觀念は斯くして發達し完成した、自由思想は斯くして漸く勢力を得た。又彼等は自然界を征服して自ら得意を感じて居たのみで無く、自然の事物に對して限り無き親みを感ずるやうになつたのである。彼等は自然の事物を研究し、自然の力を利用して其の日常の生活を便利にし、また多趣味ならしめた。卽ち自然界は彼等に取つて極めて親しいものに感ぜられた筈である　彼等の間に美術や文學が目覺しい發達を遂げたのも當然の事である。自然を畏れ、若くは自然を賤む人民の間に、文學や美術の充分に發達すべき理は固より無い。

羅馬人

羅馬人は希臘人に比べると頗る實際的の國民であつたから、學問や藝術に於ては之に對してやゝ遜色があつたが、社會制度を完全にし國家組織を完備せしむる技倆に於ては、希臘人よりも遙かに卓越して居た。されば人格の觀念の如

中世の變態

き權利思想の如き、いづれも羅馬時代に於てまた著しい發達を遂げたものである。其の後羅馬が衰へたと共に中世の混亂時代が現出し、東洋諸國からも種々の壓迫を受け、その間に基督教が勢力を得るやうになり、一般に頗る消極的の思想が勝を制したが、これは寧ろ一時の變態と稱すべきものである。天國の生活にあこがれて此の地上の生活を輕視し、自然界の事物を盡く神聖なる造化の力の現はれたものとして、たゞ敬愛の態度を以て之に對すべしと考へ、之に對して自由に研究し討査することを憚るやうになり、古代の剛爽快濶の氣象が殆んど全く失はれたのは歐洲人としては極めて不自然なる一時的變化である。不自然な事がいつ迄も續き得られやう筈はない。紀元第十四世紀から漸く反動的の潮流が勢力を得來つて、やがて希臘思想復活の氣運が勃興して、『ヒユマニズム』の發達となつた。

『ヒユマニズム』とは近世の初期に於ける學問、文藝等を一貫したる、一の新

ヒユマニズムの勃興

封建制度の倒壞

なる主義であつて、之を簡單に解釋すれば『人を中心として凡てを觀察し研究し解釋すべし』といふ主張である。人々が自由に研究し、計畫し、活動すべき力を具へてゐるのを强ゐて抑へて、或る教權の下に屈するのは誠に謂はれの無いことであると自覺した所から、自然に發生し來つたものが此の『ヒユマニズム』の主張である。此の反動的新思潮は、社會狀態の變動によつて、更に著しく其の勢力を强めらるゝ事となつた。それは餘の事で無い、封建制度の根本的破壞である。封建制度といふものも歐洲人の性質に適合したものでは無く、時勢の推移によつて生じた一時的の變態であるから、早晩倒壞すべき運命をもつては居たが、その倒壞を促した直接の原因は彼の十字軍の失敗である。紀元一〇九六年から一二七二年まで殆んど二百年の間多くの人の生命を損じ、多くの費用を投じ多くの困苦を冒して、七回まで起した十字軍は要するに不結果に終つて、其の目的たる耶蘇の聖地を異教徒の手から取り返さうといふ企ては空に

歸してしまつた。されば其の直接の效果は全く無いわけであるが、その間接の效果に至ては蓋し莫大なものである。

各國民の奮起

此の二百年の間、十字軍の幹部となつて努力した國王や諸侯は殆んど皆疲弊しはてゝ、其の國、その領土を維持すべき力を失つた。斯くして一般人民は封建制度の羈絆を脱し、各自に力を盡して其の市や村を維持し經營すべき運となつた。又各國の人民が久しい間相伴つて東洋の天地にさすらひ、共に多くの艱難を嘗めたのであるから、自然各自の間に強い同情が生じ、互ひの思想をよく理解しあふやうになり、割據的の氣風は殆んど全く無くなつた。是れも亦封建制度の壞れる重要な原因の一であつた。斯くして歐洲各地の人民は共に『自分の力で立たなければならぬ』といふことを強く感ずるやうになつた。彼等は斯く感ずると共に、自分達の責任の非常に重くなつたことを自覺したが、それと同時に全く窮屈な羈絆を脱して自由に活動し得るやうになつた悅びをも感ぜざるを得なかつた。斯の如き機運に迫つたのであるから、其の地位身分の如何を問はず、各自皆有らん限りの力を揮つて其の事に盡し、新なる發展を計畫するより外は無いといふことを、誰が敎へるとも無く、一般に覺悟するやうになつた。彼の希臘時代から發達して居た『互ひに人としての價値を認め、互ひに人として尊重しあはなければならぬ』といふ思想が、非常な勢をもつて復活して來たのは、固より當然のことである。斯る事情によつて助けられて、『ヒユマニズム』の主張は愈々有力なものとなつたのである。

希臘思想の復活

研究と其の應用

人は其の本性として知る力と感ずる力をもつて居る者であるから、外から拘束を加へなければ、觀察し研究することを止めぬ者である。然るにそれが生存上の必要と相伴ふ時には、その觀察研究に對する熱心は又何層倍か强くなるわけである。今歐洲各地の人民は自由に解放さるゝと共に大なる責任を負はされた。先づ以て各自の力を以て其の土地を經營し、繁昌させて行かなければなら

ぬのである。王者や諸侯の保護に依賴して居られぬことになつた。又羅馬教會の僧侶に賴んで神の保護を求めるといふことも、十字軍の結果などに照して見ると如何にも當てにならぬやうに見えて來た。玆に於て彼等は皆共に『何とかして自分達の力を以て大なる富を作らなければならぬ』といふ考へを懷くやうになつた。カアライルが、

吾人は兎にも角にも必要に迫らるゝと共に、吾人の事に着手す。されど吾人は其の心要と相調和するに至りて、初めて喜悅と希望とを以て吾人の事に從ふ。斯くして吾人は必要に打克ち、自ら必要の中に於て自由を得たることを感ず。――バーンス論

と云つたのは道理のある言である。歐洲各國の人々も最初は其の國を富ます必要を感じ、此の必要に應ぜんが爲に種々の研究に着手したのであるが、後には研究そのものに充分の價値を認め、一切の利害關係を離れて專ら研究に力を用ゆる人も少からず出るやうになり、目覺しい文化の發展を示した。

近世人の努力

富を作るのには富源を見出さなければならぬ、富源を見出すの途は二つある。その一は自然界の事物を深く究めること、其の二は交通の發達を謀ることである。斯る必要から各國民の必死の努力が此の兩方面に向つて注がれ、皆着々として其の功を收めた。天文學も、生物學も、物理學も、數學も、皆目覺しい進歩を示した。それが又直ちに實際上に應用せられて磁石の發明となり、航海術の進歩となり、機械工業の發達となり、醫術の革新となり、それに伴つて各國共に著しい經濟的膨脹を遂げた。各國民の生活狀態は恐ろしい勢を以て向上して行つた。時々に各國民が自ら其の努力の跡を振返つて、『吾々は此の五十年間にどれ丈の事をしたか』、『此の百年間にどれ程進んだか』と數へ立てゝ見ると、人の力の偉大なことに自分ながら感服するばかりであつた。力を用ゐて止まぬならば、やがて凡ての事が分るやうになるであらう、凡ての自然力に打

克ち得る時が來るであらうとまで、確信し得るやうになつた。

自然は技術を支配す、而して天才は自然を支配す。――ホランド

といふ如き語も、決して誇張の意味では無く、確信を以て發せらるゝやうになつたのである。

得意の感

斯くして年代の進むに隨て人々は益々自分達が自然界を征服し得たのに就て、多くの得意を感ずるやうになつた。海を征服して遠方に領土を開いたのを得意とする政事家もあり、空を征服して天體の委しい研究を遂げたのを得意とする學者もある。その他發明家事業家等、それ〳〵に又特殊の得意を感ずべき事をもつて居る。互ひに努力し、互ひに得意を感ずるとなれば、其の間に競爭の生ずるのは自然の結果である。研究にも競爭がある、發明にも競爭がある、發見にも競爭がある。新しい品物を作るに競爭があれば、その販路を開く上にも勿論競爭がある。新しい土地を見出す上に競爭があれば、それを占有する上

競爭時代

國際の競爭

に於てはなほ更競爭がある。競爭の種類は殆んど無數であるが、何れのものも日を追うてたゞ烈しくなつて行くのみである。個人と個人と相對すれば其の間に競爭が行はれ、團體と團體と相對すれば又その間に競爭が行はれる。なほ進んでは國民的競爭となり、人種的競爭ともなる。此の劇烈なる競爭の間に、凡ての事が目覺しい發達を遂げて行くのである。

また何事も研究が進んで行くに隨て、問題の數は益々多くなり、研究すべき事項は益々精に入り微に入るのは自然の勢である。されば一人の力を以て種々の事を究めるといふことは到底出來ぬやうになるから、何事も皆分業となつて來る。人々は各立別れて自分の得意な事に專門となり、益々深く益々精しくそれを究め、其等各種の專門家の力が集まつて、社會全體の進歩發達を謀らなければならぬといふことになる。されば個人の價値を充分に認めると共に、同心協力の必要を更に痛切に認めなければならぬやうになつて來る。如何に優れた人

國際間の競爭

でも、此の世の中に孤立して居ては何の働きも出來ぬのである。斯る有樣であるから、個人間の競爭は自然に幾分か和らげらるべき性質を有するに至るが、團體と團體との競爭、殊に國と國との間の競爭は最も激烈を極めて、殆んど際限無く其の熱を高める。何人も豫想し得ないやうな事實が往々にして國際間に發生するのは、皆斯る劇烈なる競爭が極度に達した爲である。『鬪諍堅固の世』と佛が名けられたのは、實に今の世の事かと思ひ當る次第である。

一二　法華經と近世文明　下

個人間の競爭や團體間の競爭は、進步を促す原動力となるけれども、其の度を超える時には種々の弊を生じて、國家社會の平和を擾すことになる。依て之を防遏するが爲に種々の方法が講ぜられ、種々の施設も存して居るのである。國際間の競爭も道理は全く同じものであつて、世界人類が其の爲に受ける所の

宗教の勢力

損失は隨分夥しいものである。併し國よりも上に立つべき力は、今のところ何處にも存在せぬ故に、之に對する制裁は一更に行はれぬ。ソロモン王の榮華も一輪の百合の花に現はれた神の榮えに及ばぬといふやうな思想が、若し人の心を支配し得る程に有力なものであつたなら、隨分有效な制裁力であつたであらうが、不幸にして近世歐洲の宗教は徒に其の形體を存するのみで、其の實力を失つて來たから、烈火の燃えるやうに高まり來る國際間の競爭に對しては何等の事をも爲し得ぬのである。而して其の競爭の極度まで高まるに及んでは、必ず戰亂が爆發する。昔の百年戰爭や三十年戰爭も、現今の歐洲の大戰亂も、其の事情に多少の異ひはあらうとも、其の根本原因は同じものである、昔もフレデリック大王の野心が戰亂を惹起したとか、ナポレオン帝の他國を壓迫したのが惡いとか、種々の攻擊があつた。現今でも獨逸のカイゼルなどは各國民の攻擊の衝に當つて居る。勿論それ等の人に直接の責はあらうが、根本的にいへば

平和論の效果

各國民が其の競爭熱の昂進するのを制し得ぬが爲に、自ら招いた禍である。

戰爭の及ぼす慘害、戰爭によつて生ずる損失を一般の人によく了解せしめて、戰爭を未發に防がうといふ計畫は今までに隨分繰返されたことであるが、結局何等の效果も無くて終つた。國際裁判といふやうな事に就てもいろ〳〵の攻究は重ねられて居るが、如何なる方法に依ても、暴力を以て國際間の決定を蹂躙する者に對して制裁を加へることの出來ぬ間は、其の計畫は空な計畫で終るより外無いのである。今回の大戰亂の如きは非常に悲慘な事が多く起つて歐洲一帶の人心に非常に痛切な感じを與へて居ることであるから、戰後は必ず平和主義の思想が大に勢力を得るであらうといふ說も度々聞く所である。それは今回の戰爭に限らず、いつでも大戰爭の後には、平和主義が一時勢力をもつものである。しかし各國の間に競爭の熱がまた高まつて來れば戰爭によつて與へられた悲慘な印象などは、いつしか忘られてしまふのが常である。獨逸が正義

競爭の悲慘なる結果

人道を無視して野蠻な行爲をしたに就て、他の諸國から之に加へた非難には、何れも一應の道理はあるが、各國共に其の領土擴張の歷史を調べて見ると、一として正義人道を無視した行ひをして居ない者は無いといふ有樣である。それは何れの國民でも正義人道を辨へぬといふわけでも無いが、競爭の熱が頂點に達する時には所謂狂熱の狀態になつて、正義人道に關する冷靜な判斷も擾され、戰爭の慘禍などに就ての痛切な印象をもツイ忘れてしまふのである。獨逸はナポレオン帝の大活動をした際に最も大なる打擊を受けて發憤し勤勉努力を重ねて漸く國力を充實せしめて來ると共に、世界列强の間に覇を稱するやうにならうといふ大望を起し、主として英國を競爭の敵手として、今日に至つたのである。それで餘りに成功を急いだ爲に今度のやうな無理な戰を起して、世界の非難を集めたやうな有樣であるが、他の國民と雖も若し獨逸と同じ立場に立つことになつたら、果して正義人道を顧慮して居るであらうか、是は頗る疑は

個人の價値

しいことである。

兎に角數百年間を通じて競爭を續けて、優勢を持して行かうといふには、國の實力が充實して居なければ出來ぬことである。實力を充實せしむるのには、國民全體が同心協力しなければならぬ。しかし如何に國家の爲だと云つても、自分が更に價値を認められて居ないのに、其の業に力を盡すといふことは、普通の人情として出來難い事である。されば人の地位職業の如何を問はず、努力奮勵して其の專門の事に秀でた人は、一般社會から充分の尊敬を受けるといふやうな風習を作ることが、國力充實の重要なる條件となつて來る。互ひに人格を尊重し、互ひに權利を尊重するといふことは、夙くから歐洲一般に發達した思想であるが、斯る事情の下に更に著しい發達を遂げた。是は頗る結構な事であるが、之に伴ふ所の弊害も亦決して少く無い。其の實力に相當した待遇を社會から與へられるといへば、極めて公平な事のやうであるが、實際此

個人の實力と其の待遇

自法隱沒の實狀

人が如何程の實力をもつてゐるか、實際どれだけ其の業に秀でゝ居るかといふことが精密に外から分るものでは無い。されば世間に於て勢力を作ることの巧拙によつて、其の世間から受ける待遇の厚薄が定められることになり、如何に實力があつても左樣いふ掛引きの下手なものは、社會の劣敗者になつてしまふといふ場合が少くない。隨て自分の勢力を作るためには、他の者を壓倒しても仕方が無い、氣の毒などゝ云つては居られぬといふ樣な氣分が、自然と世の中に漲つて來る。それで世の中が一體に優しみを缺き、潤ひを缺いて兎角人情が險惡にのみ傾いて來るのである。

宗教は此の困難を濟ふに力あるものでなければならぬ。實際罪を犯したものには神の憫みが殊に深いとか、此の世に於ての失敗者は天國に於て多く惠まるべきものであるとかいふ基督教の教へは、優勝劣敗主義で押通さうとする世間に對して、貴い藥石であつたのである。しかし世相が次第に險惡の度を加へて

隔てらるる人と人

來ると共に、其の貴い教へも次第に之に打負かされて、救治の力も次第に乏しくなつて來た。末世を名けて『白法隱沒の世』といふは、まことに能く當つた語である。斯くして成功者は其の成功に驕つて劣敗者に對する同情の念に乏しく、劣敗者は自ら省みることを忘れて他の成功者の專横を怨み憎むといふ風になるから、其の間は著しく疎隔せざるを得ぬ。又人の慾望は外から刺激せらるるに隨つて、いくらでも增長して行くものである。近世歐洲人の營んで居る華やかな生活は非常に强烈な刺激力をもつて居て、其の中に浸つて暮して行くものは、殆んど際限なく其の慾望を增長せしめ、之を制限すべき方法をすら知らぬ有樣である。されば外からは成功者として羨み視らるゝ者でも、決して滿足を感じ、平和の心をもつて暮すといふわけには行かぬ。

妬まるゝは憫まるゝに勝れり。——ヘロドタス

といふは古來から有名な語であるが、世の中が複雜になると、其の憫まるゝ者と妬まるゝ者との區別が、さう截然とは立てられぬやうになる。或る點に就て他の人を憫んでも、又他の點に就ては其の同じ人を妬まなければならぬやうな事も隨分ある。寧ろ

妬むは相互的のものなり。——ジョンソン

といひ、若くはまた

人は皆妬む心ある故に、他の者の不幸を見て之と比較せる時のみ自ら滿足を感ず。——ジョンソン

同情心の缺乏

といふ如き語の方が近世の人の生活に適切である。斯くして人々は紛糾した感情の中に、安からぬ生活を續けて行くのである。

譬へば長閑な春の海に、帆足をそろへて走る幾艘かの舟も、急にあらしが起れば皆散々になつて、異つた方角に向いてしまふ。世の中も長閑であれば、人の自然に具へてゐる同情の念が、互ひの心と心との底に通ひあつて居るであら

うが、險しい競爭の中に採まれて居ると、互ひに自ら護ることに急であつて、人の喜びの爲に笑ひ人の悲みの爲に泣く暇などは無いやうになる。

利己心は自己を中心として立つ、愛は自己を離れて全宇宙の中心に立つ。愛は常に統一に向ひ、利己心は孤立に向ふ。愛の統治は繁榮せる市民の爲なり、利己心の暴虐はたゞ荒凉の地を作るのみ。利己心は感謝を得んとして種を播き、愛は報恩の念なき者の爲に播く。愛は只與へ、利己心は貸すなり。愛は恭しく正義の王位の前に立ちて其爲すべきを爲すのみ、次に何物の報酬の來るべきかを問はざるなり。たゞ犧牲者として得たる冠の貴きに滿足す、地上に於ての賞をも、乃至天上に於ての賞をも敢て望まざるなり。――シルレル

といふのは誠に貴い教へであるが、世間の實際は之と正反對の方向に走り、自己を中心とする思想の發達すると共に、次第に愛に遠ざかるのは是非の無い次第である。

分業に伴ふ悲哀

人の心と心との離れて行くのは、たゞ利害關係に依つてのみならず、近世文明の特色に伴ふ一の避け難き悲哀である。前に云ふやうに國力を充實せしむることが急務である上は、是非とも各人各個に其の得意の事に全力を注がなければならぬ。狹隘なる階級的思想を打破して、互ひに其の特色を發揮し、互ひに社會上に相當な地歩を占め得るやうにしなければならぬ。何事も皆分業的になり、何人も皆自由に其の力量を奮ひ、各自に特色を發揮して進んで行く有樣は、確に古代に於て見られなかつた偉觀である。然るに人の爲す業が或る一方に偏すれば、其の心も亦一方に偏するを免れぬ。たとへば手を使ふ者は手ばかり強くなり、足を使ふ者は足ばかり發達すると同じやうに、心の方も自然に偏したる發達をするのである。されば少年の時に非常に親しくした友達でも、互ひに專門とする所が異つて年月を經る間に、自然と互ひの氣分に一致し難い所が多く出來て、自然に疎々しくなるといふ例が極めて多い。

悲しき協力生活

然らば同じ専門に屬する者は皆互ひに同情があるかといへば、是も頗る困難なことである。同じ專門同士の間には、互ひに優れたものになりたいといふ競爭の念が強い。それが或る程度を超して高まる時には、殆んど敵對の情とも稱すべきものを互ひに懷くやうになる。『兩雄竝び立たず』とは吾が國でも昔からいふことであるが、競爭の度が劇烈になると、竝び立たぬ感情を懷く者がどうしても多くなるのである。斯く種々の事情から人の心と心とは離れて行きがちであるが、世の中は月に日に組織的になつて行くから、何人も孤立しては一日を送ることさへ出來なくなる。團體の力でなければ、何れの方面に於ても勢力を作ることは到底出來ぬ。されば心と心との離れ合つた人が、その生存の必要上から手を携へて世に立たなければならぬといふ甚だ悲慘な結果を生ずる。華々しい生活をして居る人が、何かの機に自分の心に反省して見ると『己は獨り者だ』といふ感じが起る、『寂しいものだナア』といふ歎聲が自然と出る。

骨肉間の疎隔

かぎり無く悲しきものはともし火の消えての後の寢覺なりけり――かげ樹

といふやうな感じは、却て世に時めいて居る人に多いものである。

また心の疎隔するより生ずる悲哀は、時として父子兄弟の間をまで侵すことがある。世間が階級的であつた時には、父の業を繼ぐ子が多くあつた、又兄弟も大概同じやうな身分で、同じやうな暮しをして居た。然るに人々が自由に其の事業を擇むやうになると、父子兄弟それ〴〵に向ふ所が異つて來る。世間が進歩して分業的になればなる程、此の傾向は益々強くなる。さうで無くても老人と青年とは思想の一致せぬものであるのに、其の專門が異ひ其の生活狀態が異へば、疎隔の傾向は益々強まるのみである。それで動ともすれば、互ひの考へを全く理解しあはぬといふ場合さへ起る。ラスキンの著『塵の倫理』の中に、次のやうな悲慘な話が出て居る。

一八六二年七月二十一、二日の『ガリヤニ紙』にイオン州で或る農夫の子の

慾ましい父子の例

審判があつた記事が載つて居る。此の農夫はマレー・ル・グランに住んで居たが、二年前に自分を扶養するといふ條件で、其の財産全部を二人の子に讓つた。然るにシモンといふ子は其の約束を守つたが、ピエールといふのは父に何も贈らなかつた。審判の結果ピエールは毎年父に對して八十四フランを贈るべしといふ判決を與へられたが、ピエールは『金をやるくらゐなら死んだ方が宜い』と答へた。家に歸ると直に彼は河へ身を投げて死んだ、さうして其の屍骸は次の日まで見當らなかつたといふことである。

斯の如き父子を生み出した近世文明の缺點を思へば、たゞ悼ましいといふより外は無い。

勿論文明の進歩に伴ふ弊害を妨ぐ爲には、有識者が絶えず心を用ゐて居ることで、救濟事業なども盛に經營せられ、社會政策上の研究も日々著しく進歩して行く有樣である。しかし其等の凡ての努力は、却々以て世間の急を濟ふに足

らず、人心は益々險惡に向ふのみである。文明の進歩は世の中を非常に華々しく變らせたには違ひないが、之によつて人が幸福になつたとは如何しても考へられぬ。然らば曾てルソーなどが唱へたやうに、此の進歩した文明を根柢から破壞して簡易質素であつた時代の生活狀態に立返ることが出來るかといふに、それは到底出來得べからざることである。如何に多くの陷缺があらうとも、此の數世紀の間に積まれた人間の努力といふものは實に驚歎すべきものである。近世の人は誰に敎へられるともなく自然に、自分達の努力の決して侮るべからざるものであることを知つて居る。又吾々の周圍の天地萬有の中には、此の數百年間に積まれた人類努力の迹が深く刻み込まれてある。且又吾々の研究が進めば進むほど、天地萬有の組織の微妙なことが分り、以前には一更價値の無いやうに見えたものでも、吾々の工夫次第で充分價値のある者に變り得ることが分つて來たのである。そ故に此の世が如何に苦しくなつても、吾々は此の世

吾々の心の要求

を棄て去らうといふ氣にはなれぬ。多くの不平を懷きながらも、吾々は常に非常な力を以て此の社會生活に吾々の心を惹きつけられて居るのである。

吾々の心の要求は『どうかして此の社會を離れたい』といふことでは無く、『どうかして此の社會の中に意味のある生活を見出したい』といふことである。『動かずに休んで居たい』といふことを要求するのでなく、『面白く動きたい』といふことを要求するのである。勿論今の世の中には勤勞を避けて安逸を貪る者も少く無いが、彼等とても其の安逸の中に滿足を感ずるわけでは決して無く、要するに樂しく動きたいといふ望みが達せられぬ爲に、安逸を求めるやうになつたのである。如何に貴い教へであつても、此の一般人心の要求に應じられぬやうな者では、永久に人心を支配して行く力を有することは不可能である。基督教が多くの美點を有し、又過去に於て人類社會に貢獻する所の莫大であるにも拘はらず、次第に勢力を失墜して行くといふのは、此處に陷缺を有するが爲

神は死せるか

である。ニーチエは基督教で教へた所を罵つて『奴隷的の道德』といひ、『神は既に死せり』といふ極端な言までも發したが、決して神が死んだのでも何でも無い。基督教の教義を通じて見られたる神の姿に絕對の權威が無くなつたのである。而して一般の人はモット權威のある神の姿を仰がんことを要求して居るのである。

尤も科學的の研究は益々歩を進めて居るから、學說としては隨分現代民心の要求に應じ得べきものも發表されて居る。しかし此處まで迫つて來た潮流を廻轉させて、新なる平和の光りを社會に投げ與へやうとするには、理論として缺點が無いといふだけのものでは未だ足らぬのである。一通りの理屈以上に凡ての人の心の底から崇敬渴仰の念を起させるやうな、絕大の力を具へた教へでなければならぬのである。さういふ教へはもはや何處にも求められぬであらうか。

西洋文明と日本人

吾々日本國民が西洋の近世文明を輸入し始めた時には、その內容に就て深い考察を試みる暇も無く、之によつて吾々の幸福を增進し得べきものと信じて、熱心に之を移し入れることに努めたのである。然るに此の近世文明の根源地たる諸國の人民が幸福の生活を送つて居らぬといふことを知り、之に平和を與へ幸福を與ふべき筈の宗敎も漸く勢力を失つて來たと知つては、實に茫然として自失せざるを得ぬことである。しかし吾々が西洋文明を輸入したことを後悔するには決して及ばぬ。是は確かに多くの價値あるものを含んで居る。たゞ凡ての物を此の中に求めやうとしたのが間違ひであつたのである。自然に就ての研究に於ては、吾々東洋人の爲し來つた所が甚だ幼稚であるけれども、精神上の問題に就て根本的の研究考察を積むことは吾が長所であつて、就中佛陀の遺されたる敎へは、其の絕頂に立つものである。其の佛陀が特に末世の衆生を憫み給うて、其の鬪諍堅固の時の爲にと遺されたる法華經の敎へは、彼の西歐人が

佛陀の敎

久しく求めて未だ得なかつたものを與ふべき力を具ふる、最勝最高の敎へである。勿論社會の狀態は絕えず變遷するものであるから、今日吾々が遭遇する一々の場合に宛嵌まるべき敎へを、昔のものに求めることは固より出來ぬ。しかし正しい信仰によつて吾々の心の根に培ふことさへ出來れば、枝を延し花を開く働きは、その時の宜しきに應じて、いくらでも自分で爲し得られる筈である。若し法華經の敎へが汎く世に弘まつて、現代の人の心に通有する所の陷缺を充すことが出來たならば、近世文明の吾々に與へた凡ての學問、藝術、凡ての發明、發見、凡ての社會上の組織制度等は共によく調和せられ統一せられて、共に眞の幸福を吾々に與へる助けを爲すものとなり得るであらう。日蓮上人が佛敎の流布に就て

正像二千年には西より東に流る、暮月の西空より始るが如し。末法五百年には東より西に入る、朝日の東天より出るに似たり。——曾谷入道殿許御書

と申されたことは、今日以後吾々の力によつて實現せられなければならぬのである。

一三　研究と信仰　上

新と舊

吾々の踏んで居る大地は、數億年のむかしから有る大地である、極めて舊い大地である。しかし此の最も舊い大地は、凡ての新しいものを生じ、凡ての新しいものを載せて居る。最も新しい葉と最も新しい花とは、此の最も舊い大地の中に其の根を托するのである。凡て新しいものを生じ得ぬ者には生命が無い。活きるとは常に新なるの謂である。吾々が求める所の宗教も亦常に新なるものでなければならぬ。吾々が宗教を求めるのは、之を信ずることに依て、吾々の心にいつも活きたる力が宿つて居るやうにとの希望に基くものである。若し法華經の中に含まるゝ教へが、新なる文明を包容し、新なる學問藝術を包容

し得ぬやうなものであるならば、たとへ過去に於て如何に貴ばれたといふ歴史があらうとも、吾々の生命を之に托することは到底出來ぬ。經の中に、

諸の所說の法、其の義趣に隨て皆實相と相違背せじ。若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんも皆正法に順ぜん。――法師功德品

とあるに僞りが無いならば、法華經の行者は新文明の中に於て常に新なる生活を營み得べき筈である。

然るに學問の進歩が宗教上の信仰を破壞するものゝやうに考へて居る人が、世間には少くないやうである。それで信仰を維持せんが爲に學問の進歩を呪ふ人もあれば、學問の萬能を信じて宗教を蔑視する人も亦少くない。是れは何れの國にも例のあることで、曾て羅馬カトリック教の全盛時代には、信仰を傷ける恐れのある學問には隨分烈しい壓迫を加へて、研究の途を塞がうとした場合が多い。ガリレオやコペルニカスの出た頃は、モウ羅馬教の勢力も傾きかけて

新時代の動搖

居たのであるが、それでも其の壓迫は却々烈しいものであつた。ダアウヰンの進化論の發表せられたのは十九世紀の事である。それでも此の學說は信仰の基礎を危くするものだと唱へて、烈しい攻擊を加へた宗敎家は夥しくあつた。又一方には科學的研究によつて得た結論を根柢として、無神論を唱へ出した人も、十八世紀頃から可なりに多くあつた。科學的研究に數世紀を費して、其の利益をも弊害をも共に明にして居る筈の歐洲人さへ此の有樣である、まして急劇に彼等の新文明を輸入して、其の皮相をのみ窺つた吾が國民の間に、種々の誤解の生じたのは怪むに足らぬことである。

殊に此の新文明の輸入に伴つて、政治上の大變革が行はれ、賴朝が鎌倉に覇府を開いて以來六百八十餘年の間政權を握つて居た武門の勢が、一朝にして瓦解したのである。一般の人心に非常なる動搖を來したのは當然である。藤原氏の政權を握つてゐたのは隨分久しい間のやうであるが、天武天皇の崩御後から、院中政治の始まるまで凡そ四百年間である。それでさへ平淸盛が今まで藤原氏にのみ限られた太政大臣になつた時には、上下共に目を側て、世の中の不思議と稱したといふ。況んや殆んど七百年も續いた武家天下が倒れて、今までに見た事も無い外國人が入込んで來るといふ劇變に出逢つて、國中擧つて目が眩んでしまつたのは不思議でも何でもない。『舊いものは皆役に立たなくなるのだ、何でも新しくなるのだ』といふ感じが、斯る劇變の間にいつか一般に行き亘つた。大名が無くなり、武士が無くなり、頭に髷が無くなり、腰に刀が無くなると共に、宗敎も道德も何もかも、盡く舊いものは無くなる時節であらうと思ひ込む者の多かつたのも亦自然の成行きである。此處へ科學的の智識が新に入込んで來たのである。それが舊道德、舊信仰に代るべきものとして迎へられたのも、亦自然の成行きである、其の科學的智識の極めて淺薄なものでも、燃ゆるやうな好奇心を以て之を迎へた日本人を驚殺するには充分であつた。實は

科學の限界

科學に對する誤解

科學といふものゝ領分は決して無限で無く、

科學は事物の此方の端を明にすれど、彼方の端を明にするものにあらず。

――パアクハアスト

といふ通りのものであるが、科學によつて驚殺された日本人は、左樣の事に思ひを致す暇が無かつたのである。

何事でも淺薄なものに、貴く美しい性質の具はらう筈はない。今まで淺薄な科學的思想によつて與へられた害毒は少からぬものであらうが、それは科學その物の罪では無い、淺く之を窺うた爲の過である。科學が人に敬虔の念を失はせ、敦厚の風を傷らせ、機械的、物質的の思想にのみ傾かしめるやうに思ふのは、深く科學を究めざる者の事である。科學は現象界の研究を旨とする者であるから、現象以上の問題に對して何等の答へをも與へ得ぬのである。然るに人は現象界の事のみを考へては居られぬものである。吾々の眼の力や耳の力の屆く所は限りがあるが、吾々は其の力の屆かぬ所に多くの事を認めて、それで吾々の人生觀を組立てゝ居るのである。それを一概に空想として排斥し去るわけには行かぬ。たとへ空想と雖も其の形を成すには、成すだけの理由がなければならぬ。眞の科學者は其の現象界に於て究め得た所を示して『此以外には何も考へるに及ばぬ』とか、『此より以上の事を考へるのは空想である』とか主張するやうな、左樣に輕卒不謹愼なものでは無い。科學者は科學的智識が人生の諸問題を解くのに大なる光明を與ふべきことを無論主張するが、決して此以外のものは凡て無用だと主張する者ではない。眞正の科學的智識は貴い宗敎の敎義を排斥するものでも無く、又それと相容れぬ性質のものでも無い。兩者は各その領域をもつて居る。而して兩者の力が相伴つて働くことに依つて吾々の生活は眞の幸福なる狀態に向つて進み得べきである。

淺い科學的の智識によつて、人生の小い問題の一二を解き得た者は、凡ての

科學の價値

問題を此の流儀で解き得らるべきかのやうに考へる。しかし是は深入りせぬ者の誤解である。深く科學の性質を究めた者は、其の具有する偉大なる力を知ると共に、又その力の働くべき範圍をも正確に知り得べきである。既にいふ如く、科學は現象界に限られたる者である。しかし之が爲に科學は他の文學とか哲學とかいふものゝやうに殆んど無限の領域を有する者に比べて、卑い地位を占むべきものと斷定することは出來ぬ。其の廣さに於て限られたる領域ではあるが、其の深さに於ては無限である。大海の水は多く、一滴の水は少い。しかし一滴の水でも深く之を究むる時には、種々無量の微妙な性質と作用とを含むものである。大海の全體を捉へて研究の題目としても、その中の水の一滴に就て究めても、其の研究の價値に於て固より優劣は無い。一枚の木の葉の搖くのでも、叢に鳴く小い蟲の一聲でも、深く之を究める時には、其の中に大宇宙の全體を支配する莊嚴なる力が矢張り現はれて居ることを看取し得るであらう。

廣さと深さ

自然と人との關係

まことあれば土の底にてなく蟲の聲もくもゐにひゞくなりけり。——橘曙覽

と歌人は詠んだが、其の土の底に鳴く蟲をも天上の日月星辰をも共に支配する大なる力は、日の光りの中にも、蟲の音の中にも共に現はれて居るのである。されば精しく究め深く觀るものは何れの處にも偉大なるものを見出し得べきである。

斯く極めて微細な物にまで具はつてゐる微妙な作用を委しく究めることによつて、吾々の此の宇宙に於ける立場がはじめて明確に知らるべきである。又斯くすることに依て、吾々は安んじて自然と共に住むことを得べきである。吾々は曾て無智無識であつた時に、常に自然力の爲に壓へられ惱まされて居た。家を作れば風に吹き倒され、海へ出れば波に船を覆され、長い間苦心をして作つた穀物も一夜の嵐に枯らされてしまふ。宛ら吾々は自然力の爲に翻弄されて居る有樣であつたが、自然が吾々に敵意をもつのでは無く、たゞ自分達の智識の

親愛の感

足りなかつた爲に外ならぬ。されば吾々が研究を積んで自然界の事を精しく知り得るやうになると共に、前には吾々の敵であつた自然力が悉く吾々の友となり、風でも波でも皆吾々に便利を與へ吾々の生活を向上せしむべき助けを爲して來るのである。しかし吾々が自己の智識に誇り、宛ら暴虐の君主が其の人民に對するやうな態度で自然に對するのは全く間違つて居る。眞によく自然の事物を究める者は、吾々の周圍の凡ての物に對して非常なる親しみを感ずる筈である。吾々は友達に對するやうな溫い、親しい感じをもつて自然界の中に住むべきである。科學が人を驕慢ならしめ冷酷ならしめるといふ筈はない。

科學は眞理を知り且貴ぶべきことを吾人に教ふ、また吾人が眞理を知り且愛することによつて、此の地上に於て意義ある生活を爲し、且自己の心力の價値を認め得べきことを教ふ。——モセス・ハアヴキー

といふは穩當な見方である。斯の如き價値ある科學は、其の限られたる現象界

の研究によつて、人類の進歩に偉大なる貢獻を爲し得べきである。現象以上の問題にまで立入り、他の領域をまで侵して自分の價値を高めやうと努むる必要は更に無い。眞の科學者は自ら其の安んずべき所を知る故に、科學以外に何も入らぬなどといふ愚な主張をするものでは無い。

たとへ社會の狀態が如何に變化しやうとも、人が人である間は、必ず千萬年を通じて不變なるものが存して居なければならぬ。數千年前に蠻人が木の枝を集めて作つた小屋を潤した雨は、數千年後の文明人が石を疊んで作つた高樓をも同じやうに潤すのである。されば未開の人を濟つた宗教が開明人を救ひ得るといふことに更に不思議はない。しかし變化しないといふのは宗教の骨髓を爲すものに就ての事で、其の形體の中に時代と共に變らなければならぬものを多く含んでゐるのは無論のことである。或る國で發達した宗教は、その中に其の國民的特色を帶びて居る。他の國で發達したものは、又その國民的特色が含まれ

唯物論と無神論

て居る。而も何れの國民でも決して完全なものでは無いから、其の特色といふ中に、多くの不完全な要素の混じて居るのも據ないことで、それ等は時代の移り行く間に亡ぼされてしまふのが當然なことである。若し或る宗教の形體が時代と共に壞されて行くのを見て、その壞された部分が何であつたかを深くも考へず、世が開明に赴くと共に宗教が亡びて行くやうに判斷するならば、愚の至といはなければならぬ。若し又宗教の舊い形體を少しも變へずに保存したいといふ考へから、學問の發達、思想の進歩を咒ふ者があれば、是も亦愚の至といはなければならぬ。

勿論科學的研究の發達に伴つて、唯物論が起り無神論が起つて、宗教は畢竟愚者を導くの用を爲すに過ぎぬと主張した例もたしかにある。西洋では十八世紀末に、斯ういふ風潮が大分勢を得た。吾が邦でも維新以後暫くの間は此の風であつた。しかし斯の如き例によつて、科學と宗教との關係を定めやうとするのは大なる間違ひである。前章に述べたやうに、近世の初期から發生した自由研究の風潮は、着々として其の效果を收め、新しい發明や發見が引續いて公にされると共に、其の實生活の上に及ぼした變化も頗る目覺しいものであつた。されば吾々は理智の力を以て如何なる秘密をも開き得るであらうといふ、誇大な思想も頭を上げて來た、それで今まで自然界に對して用ゐた研究方法を凡ての問題に應用し、自然界に於て發見した法則を以て凡ての精神現象をも說明しやうといふ希望も盛んになつて來た。此の思想と結び付いて、社會の各方面に於て階級制度を破壞し、平等な生活をしたいといふ要求も著しく發達して來た。佛國などは貴族や僧侶が久しい間甚しく專橫を極めて居た故に、斯る反動的思想が特に恐るべき勢を以て高まつて來たのである。

反動的思潮

永久に自由を享有せんと欲せば、先づ自由を制限せざるべからず。——エドマンド、バーク

科學の示せる平等觀

といふは道理のある言であるが、其の勢の激するに當ては、斯ういふ冷靜な判斷の出來るものでは無い。凡ての神聖とか尊嚴とかいはれるものを引下して、世間普通の標準に置かなければ止まぬといふ意氣で、種々の運動が行はれたのである。

果て無く澄み渡つた空と、その空に輝く月や星は、昔から久しく莊嚴とか、神祕とかいふ事の表徵として仰がれて居た。然るに科學は其の空や月や星に就て多くの事を吾々に敎へた。それは莊嚴とか神祕とかいふ思想を破壞すべきものであつた。科學の敎へる所によれば、あの美しい光を放つ月も星も、吾々の踏んで居る此の地球と格別變らぬものである。その運行して息まぬのも別に神聖な力が之を支配して居る爲では無く、互ひの間に存する牽引力の關係であつて、之を機械的に說明することが出來るといふことである。又吾々自身の心に起る種々の感情に就ても、科學は之に機械的の說明を與へた。腦や神經の細胞

國家と宗敎

に或る變化を起せば、直に感情の上に大なる變化を生ずるものであると知れば靈感とか神託とかいふことも一更貴い意味をもたぬやうに思はれて來た。勿論科學は凡ての問題を解くべき力をもたぬから、神祕が盡く除かれたといふわけには行かぬけれども、今まで神祕的に思はれて居たことが幾つと無く機械的に說明されるやうになつたのであるから、科學の進步に伴つて神祕の領分が次第に減じ、やがては凡ての事が機械的に說明せらるゝ時が來るであらうと思ひ込む者の出來たのも、無理からぬことである。

又國家の成立に就ても、古に於ては種々の神祕的の傳說が語り傳へられ、神の加護が無ければ國家の繁榮を續けるとはむづかしいやうに考へられて居た。希臘や羅馬で祭つた神々は、いづれも特に其の國を護るべき約束のあるものと考へられたのである。アウガスチン帝が耶蘇敎に歸依して後は、耶蘇の所謂父なる神の加護が國家の存立のために必要なものと考へられ、彼のシャーレマン大

帝が羅馬法王に援助を與へて異敎徒の迫害を免れしめたのも、實は其の功德によつて自分の國家を繁榮せしめやうといふ考へと伴つてのことである。然るに耶蘇の靈地を異敎徒の手から取戻すといふ神聖な目的の爲に、帝王や諸侯の力を集めて、羅馬法王の嚴かなる祝禱を受け、必勝を期して出發した十字軍は、久しい歲月を費して不結果に終つた。是は一般人民に疑惑を起させなければならぬ事實である。その後封建制度が全く壞れて、人民が各個に努力をして其の市や其の村を維持しなければならぬことになり、大に發憤して努力を續けて見ると、其の效果は久しからずして明に現はれて來た。玆に於てか、各自に努力さへすれば國家の維持は必ず出來るといふ自信が次第に固くなつて來た。それと共に國家の成立に就て神祕的な意義を認めることを要せぬ、國家は各個人の便宜の爲に存在するものであるといふ思想も亦漸く發達して來た。

國家は大規模の機械なるが故に、徐々と運轉すべきなり。――ベーコン

機械的解釋

といふやうな語も發せらるゝに至つた。

斯る機運の中で、何事によらず機械的に解釋するといふ風が發達し、神祕的の思想を次第に排斥してしまつた。それが極端にまで行けば、凡ての宇宙の出來事を物理的の原則によつて解釋し、凡ての精神現象を生理的の原則によつて解釋し、貴いとか美しいとか、有難いとかいふことは皆習慣的に出來上つた觀念にすぎぬと斷定するに至るのである。斯くして唯物論も出來上れば無神論も出來上る、佛國革命のやうな恐ろしい事も出來上る。斯ういふ風潮が永久に社會を支配して行くことになれば、萬事が打算的になつて、たゞ利か不利か、便か不便かといふことのみが考量せられ、情誼も無ければ、風趣も無い、沙漠の眞中に住むやうな世の中になつてしまはなければならぬ。たとへ電燈がいかに華やかに耀いても、汽車や自動車がいかに早く走つても、更に面白いことも樂いことも無い世の中になるであらう。科學が斯ういふ機運を作つたのならば、

吾々は斷じて科學を排斥することに努めなければならぬのであるが、よく考へれば決して科學に罪があるのでなく、是は過渡の時代に免るべからざる、一時的の不健全な狀態に過ぎぬのである。

一四　研究と信仰　下

唯物論と人生

『汝は小なる者なり』と久しく敎へられたのに對して『否我は小ならず』と叫んだのが、近世文明を生み出した最初の聲である。更に『汝は小なる者なりき』と過去の事實によつて示さるゝに對して『然り然れども我は偉大なるべき者なり、我は偉大なるを得べしと信ず』と答へて、驀地に研究に進んだのである。然るに其の研究の結果として唯物論に陷り、機械的の人生觀を打立つることになれば、其の當初の宣言を我から打消すわけになるでは無いか。自ら甘んじて物質の下に屈し、自ら甘んじて一切の精神現象を機械的作用に過ぎずといひ、人生に神聖なる何ものも無く、莊嚴なる何ものも無いと定めるのは、自ら侮るの甚しきものでは無いか。國家も神聖で無い、帝王も神聖で無い、英雄も特に偉大といふことは無い、聖賢といふも肉體を具へた普通の人に過ぎぬといふやうに、凡ての貴いもの、美しいものを盡く引下してしまつて、是で平等になつたと思つて居る人は、斯くして人といふもの全體を（勿論その人自身も共に）人間以下に引下して居ることに氣付かぬ、まことに憫むべき者である。

他の物を小く視ることによりて、自己の偉大を示さんとするは非なり。偉大なる人は小き物を化して偉大にする力をもてる人なり。小き物を輕視する人は決して偉なる物を理解すること能はず。――ラスキン

といふは深く味ふべき語である。但し研究の結果が如何しても此處に歸着せねばならぬものならば、致し方も無いことであるが、決してさういふ理は無いのである。

科學は何を教へたか

能く考へて見ると科學的研究の進んだ結果は、神聖なものを凡庸に化したのである。月や星を此の地上の石瓦のやうに價値の無いものと思つたのは、極めて淺い考へ方であつて、若し深く考へて來れば、此の地上の石瓦の中に月や星のやうな美しさが見出さるべきものである。神の住む所と思はれてゐた天上界が、科學の教へる所によつて、吾々の住む此の地上の世界と隔ての無いものになつたのは事實である。しかし之が爲に宇宙の美しさ貴さは少しも損はれやう筈が無い。勿論智識の程度の低かつた頃に、想像を以て作り上げた美しさ貴さは、科學的研究の結果を學び知ることによつて壞されもしやうが、それよりも別の意味のそれよりも更に深い根柢をもつたる、美しさ貴さの觀念が作られなければならぬことである。

美は必然を根柢として存立す。——エマアソン

眞と美

といひ、若くは

美は心の眼を以て見らるゝによりて初めて眞に美なり。——ジューベル

といふ如き語は、能く此間の消息を傳ふるものである。忠實なる研究家は決して自己の發見に就て驕慢の念を起すものでは無い。如何に微細な物でも、究むれば究むる程奥深い意義をもつて居る故に、驚嘆の念と讃美の情とは研究の一歩毎に深くなつて行くわけである。第一其の研究を始める時に、たとへ塵一つでも輕々しくは扱ふまいといふ、愼重な用意が無ければ、眞の研究の出來るものでは無い。

愛するは卽ち知るの始めなり。——カアライル

といふは眞實である。何物に對しても冷淡なものは、何物をも知らずして終らねばならぬ。

科學の發達し始めた時は、それを直ちに實際に應用して利益を收めやうとい

美しき世界觀の成立

ふ考へが主であつたが、其の研究が漸く進むに隨て、眞に研究に忠實な學者も少からず出るやうになつた。而して忠實な研究が積まれると共に、研究の領域の實に無限であることが深く感ぜられて來た。今まで輕視されて居た物でも、委しく調べて見れば極めて微妙な組織を有し、極めて複雜な作用を爲すことが分つて來る。更に一層委しく調べて見ると、前に究め得た所はまだ其の微を盡したもので無かつたことが分る。一の問題が解けると共に、又新なる問題がその中から生み出されるといふ有樣である。又研究の進むに伴つて、以前には別別の事であると思はれてゐた現象の間に、離るべからざる關係の存することがいくらも分つて來た。斯くして此の宇宙間には一も孤立した物とては無く、又一も偶然に起る變化といふものは無く、或は直接に、或は間接に皆關聯して居るといふことが、詩人の空想でも無く、哲學者の斷定でも無く、吾々の經驗したる事實に基いて推斷せらるべき運びとなつた。勿論科學は現象界のみを其の

天上界と人間界

研究の領域とするものであるから、科學者は天地萬有を支配する一大法則などに就て論議することを敢てせぬけれども、科學によつて與へらるゝ材料は、吾々として斯る大法則の存在することを信ぜざるを得ざるに至らしむべく、充分なる力をもつものである。

科學的智識に基いて唯物論を立てた者は、其の研究がまだ充分精微を極むるに至らなかつた者といはなければならぬ。（勿論其の時代に對する反動的思想からも來て居ることは、前にいふ通りであるが）日月星辰と此の地上の瓦石との間に隔てが取れても、それで日月星辰の光が失はれるわけでは無い。日月星辰の大なるも、地上に於ける沙礫や塵埃の微なるも、共に包んで漏さぬ所の力はまことに驚嘆すべきものといはなければならぬ。而も其の大なる日月星辰の運行から微なる沙の轉び塵の飛ぶのにまで、一として偶然のものは無く、嚴密なる因果關係の下に行はれて居ると知れば、其の驚嘆すべきことは更に幾層倍

物質と精神

一元論

とならなければならぬ。又吾々の腦や神經の細胞に或る變化が起れば、直に吾々の感情に著しい變化を生ずるといふことも、決して唯物論の根據とはならぬ。斯く肉體の方が精神に影響を及ぼす事實があると共に、精神上の變化が直ちに肉體に變化を生ずる例も決して少くは無い。或る英人が黒奴を捉へて、其の腕に牛乳を注射し、『是は大變な毒藥である』と告げたところが、黒奴は非常に恐れ且悲み、苦悶を續けた末翌日に至て死んだといふ話もある。斯く肉體と精神とが互ひに影響しあふことは、兩者が同一の原理によつて支配せらるゝものなることを證するものである。且又細胞なるものゝ作用に就て種々に研究が積まれた結果、之を單に物質として視ることは出來ぬ、その靈妙なる作用は宛ら一の活物として考へられなければならぬといふことになつた。要するに吾々の肉體を靈魂を宿す家であると考へた昔の思想は、近世科學の進歩によつて打壞されたが、其の必然の結果として唯物論などの成立すべき筈は決して無い。物

質と精神とが全く異るものであるといふ思想が壞れて、精神の貴さを減じたのでは無く、物質を卑しむことの誤りが匡されたのである。今まで卑しまれてゐた所謂物質的のものゝ中に靈妙なる力が宿つて居り、不思議な作用が營まれて居ることを、事實の上から論證したのは科學の一大功績といはなければならぬ。

限られたる範圍の内に問題を取扱ひながら、天地萬有を支配する偉大なる原則の存在を證するものは科學である。彼の子思が

唯だ天下の至誠能く其性を盡すことを爲す。能く其性を盡せば則ち能く人の性を盡す、能く人の性を盡せば則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を贊く可し。以て天地の化育を贊く可くんば、則ち以て天地と參す可し。――中庸

と云つたのは、忠實なる科學者の爲にも尤も適切なる語である。吾々は今天地萬有の眞中に立つてゐる。吾々の周圍に現はれ來るものは無限である。此の無

其の協力

限の物は盡く吾々の研究の材料である。科學者は各その長ずる所に隨ひ、手を別つて此の中からそれ〴〵の研究の材料を擇び取つて、何處までも深く之を討究して行く。或る者は右に進み、或る者は左に進み、或る者は前に或る者は後に、各異つた方角に向つて進んで行くのであるが、而も彼等は永遠に相背き相離れて居るのでは無い。時として右に進んだ者と左に進んだ者との云ふ所に矛盾があつて、爭の端を聞くこともあるが、これは一時の事にすぎぬ。眞に忠實なる研究者は、自己の研究の範圍内に於て、曾ては各別であると思はれてゐた事實が、研究の進むと共に深い關係をもつて居ることの認められた例をいくらも知つて居る。それ故に自己の見出し得た原則が、又他の科學に於て見出された原則と密切の關係をもつべきことを考へて、大なる敬意を以て他の科學者の研究の結果を傾聽する。

眞に偉大なる人は他の偉大なるものを敬することを知る。——ランダア

美しき事實

といふは、如何なる方面の人に於ても眞實でなければならぬ。互ひに自己の研究の結果に確信を有すると共に、他の研究の結果を敬重する忠實なる科學者が今までに發表した所を綜合して見ると、天地萬有を統一する所の最高の原理のあることを信ぜざるを得ぬことになる。

曾て吾々は自ら人類たるに誇り、他の動物を卑んで視て居たのであるが、科學は動物にも多くの貴い性質の具はつてゐることを吾々に敎へた。又吾々は植物を感覺の無いものとして動物と別けてゐたのであるが、科學は兩者が生物として共通に具へたる性質の多くを吾々に敎へた。又吾々は鑛物をたゞ冷やかなる生命の無いものとして視て居たのであるが、科學は多くの鑛物の成立ちに就て人類社會の成立ちに更に異らぬ、多くの不思議な事實を吾々に敎へた。科學は事實より以上に立入つて、大膽なる斷言をせぬけれども、科學の吾々に敎へた所の多くの事實によつて、吾々は如何しても此の天地の間の凡ての物が互ひに

宇宙の調和統一

兄弟であり朋友であつて、互ひに相倚り相助けて存在し、決して一物と雖も孤立せぬことを信ぜざるを得ぬやうになつた。甲の部類の物を取つて見れば、又こゝに共通こに共通なる法則が見出される。乙の部類の物を取つて見れば、又こゝに共通なる法則が見出される。而して甲の法則と乙の法則とを併せて見ると、こゝに又兩者に共通なる、更に高い法則の存在することが明になる。斯くして吾々は吾々の周圍に統一あり調和ある大宇宙の存することを信じて、讃嘆し崇敬するに至るのである。勿論斯ういふ思想は今新しく作られたものでは無く、數十年前の詩人や哲學者の、盛んに唱道したものである。しかし今のは其等の非凡な人が頭の中で作りあげた思想で無く、以前には極めて平凡な、無價値な物と思はれて居た草の葉や土の固まりを捉へて、その中から斯ういふ思想を生み出したのであるから、こゝに新なる意義が存するのである。

科學の範圍

但し科學は飽くまでも其の研究の領域を現象界に限り、吾々の經驗し得ぬことに就ては何等の斷言をもせぬ、是がその本領である。又科學は專ら理智の働きによつて立つものであるから、其の研究の結果が如何なる感動を世間に與へやうとも、それは更に問ふ所で無いのである。科學研究の結果が吾々をして以上のやうな思想を懷かしむるに至つたのは結構なことであるが、若し之と反對の思想を生み出したからとて、科學は科學として存在の意義を失はぬものである。然るに科學者も亦た人である、科學的研究の結果を示される吾々も亦た共に人である。共に人である以上はたゞ理智を滿足せしめたのみで、他に何物をも要せぬといふわけには行かぬ。感ぜずには居れぬ、動かずには居れぬ、想像せず、思慕せず、計畫せずに居ることは出來ぬ。人生を營む上に科學的智識が大なる用を爲すことは爭はれぬが、科學的智識のみで充分であるとは科學者自身と雖も信じ得ぬことである。若し科學的智識と相調和して、人生を更に幸福にし高尚にし圓滿にすべきものが存在すると知つたら、悅んで之を取るべき筈

近世の暗き半面

である。

殊に科學者の立場から見て大に遺憾を感ずべき事實が、今の世の中に存してゐることに注意しなければならぬ。科學の發達と、各國民の經濟的發展とは共に近世文明の大潮流の中から生み出されたものであつて、互ひに相助け相俟つて互ひの進運を促して來たものである。然るに科學の發達した結果は前にいふやうに、吾々の周圍の凡ての物を親愛し尊重せねばならぬといふ思想を生み出したのに、經濟的發展の結果はそれと正反對の思想を養ひ成した觀がある。前の章に述べたやうに生存競爭の波と經濟的發展の波とは、いつも相伴つて高まつて行くもので、生活狀態が高くなると共に人々の欲望は愈々烈しく刺激されて、人情は益々險惡に赴くのみである。斯くして或る階級と他の階級との反目も生じ、或る國と他の國との戰爭も起る。而して科學的智識は斯る間に絶えず應用せられて、其の慘害を加へて居る傾きがある。例へば飛行機から爆彈を投

科學の惡用

下するとか、毒瓦斯を發散して敵を苦めるとかいふことは、盡く科學的智識の應用であるが、何れも戰爭の慘害を甚しく大ならしめたものである。斯くして圖らずも科學の進歩が人類間の危害を大ならしめたといふは、悼むべきの限りといはなければならぬ。科學者も人であるから、人の情として之を悼み之を悔まなければならぬ。

今後も科學は益々進歩するに違ひないが、科學の力のみで、人類を幸福にすることは出來ぬ。否、時としては科學が人類を不幸に導く方法として使はれることさへ起つて來る。茲に於てか信仰の必要が痛切に感ぜられるのである。科學の嚴密精微な研究と、健全にして深遠なる信仰とが相伴つて人類を導く時に於て、人類の間に眞の進歩が見らるべきである。宗教の形體の中で、或る部分が科學的智識に照して不合理であつたら、それは壞してしまつて更に差支へ無い。斯くして壞されるものは宗教の眞髓たる部分では無いのである。科學は自

研究と信仰との關係

ちを現象界に限るけれども、現象以上に何物も無いと主張するものでは無い。科學は理智の働きによつて立つが、固より其の研究の結果として驚嘆の念と讃美の情とを發達せしむることを否むものでは無い。科學の皮相を窺つた者が信仰の不必要を唱へ、物質萬能を唱へたればとて、更に科學の累ともならず、又信仰の妨げともならぬ。科學の研究は益々進んで益々精しくなり、吾々の前に現はれ來る一事一物を、盡く漏さず捉へ得るやうになるであらう。しかし何處まで進んでも『此等の凡ては何であるか』、『此等の凡ては何のためにあるか』といふやうな究竟の問題に答ふることは出來ぬ。それは信仰の力に俟つより外はない。信仰の力は吾々に究極の覺悟を與へ、絶えざる努力の源泉となるけれども、眼前の一事一物に就て吾々の起す疑問を一々に解くことは出來ぬ。それは科學的研究の發達に俟つより外は無い。

若し科學者に眞の正しい信仰があつたら、その研究にどれ程多くの益を得る

用者の協力

か知れぬ。科學者も亦た人である以上は、喜怒哀樂の外に立つことは出來ぬ。時として研究上の失敗の爲に落膽し、時として世間が其の努力の價値を認めぬが爲に憤慨し、時として競爭心の亢まつた爲に冷靜な判斷を失ひなどすることもあるであらう。彼の心が若し信仰の力によつて常に絶對の世界に惹かれ、常に悅びを與へられて居たならば、必ずや斯る困難から脫することが出來るであらう。而して宗敎の眞髓は萬古に通じて變らぬとしても、其の敎へに入る道と其の敎へを傳へる道とは、時により所により、又人によつて種々に變化すべきこと勿論である。されば世を導き人を濟はうといふ志のあるものは、たゞ自ら正しい信仰をもつて居るといふのみに滿足せず、科學的研究の結果として與へらるゝ新智識を、力の許す限り多く吸收して、其の敎への形體を其の時代に最も適切なものにすることに努めなければならぬ。斯くして吾々一般の者は正しい信仰を與へらるゝと共に、新しい研究の結果を日々の生活の上に應用すること

とが出來て、理想的の文明が漸次に此の地上に實現さるゝであらう。

一五　日蓮上人の人格と教義

新なる時代の機運は新なる宗教を求めて居る。吾々日本人の力によつて之を世界に寄與することが出來て、思想發展上に一轉機を與へ得たならば如何に愉快なことであらう。吾が邦は今まで世界の諸國民から多くの物を與へられて發達を遂げたが、未だ吾から他に與へるといふことは多くなかつた。先づ開國の始めには朝鮮から萬般の事を學び、續いて支那から學問技藝制度文物の一切を學び、佛教の入るに及んでは間接に印度から多くを教へられた。最近にはまた西洋諸國から諸般の事を學んだ。尤も吾が國民は外國のものを其儘に模倣するだけでなく、之を消化して自家獨得のものを作り出して居るけれども、未だ吾が獨得のものを外國に輸出して外國の文明に大なる影響を與へるといふ程度に

世界に對する報恩

は至らなかつた。されば今迄の處では他の恩惠を受けて未だ能く之に報ゆることが出來なかつたといふ狀態に在る。然るに若し今後に於て、

佛の滅後に於て四味三教等の邪執を捨て、實大乘の法華經に歸せば、諸天善神並に地涌千界の菩薩、法華經の行者を守護せん。此人は守護の力を得て、本門の本尊、妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に廣宣流布せしめんか。——

顯佛未來記

といふ日蓮上人の豫言が事實に現はれて、此の妙法を世界に流布せしむることが出來たならば、今まで受けた恩惠を償つて充分に餘りある程の恩惠を、世界に施すことが出來るであらう。是は決して吾々の空想でない、此の教への中に是れだけの偉大な力が確に具はつて居るのである。

今までに世界を動すやうな偉大な何物をも、吾々の國からは出して居ない。實際のことをいへば、尊嚴無比なる皇室を三千年來戴き來つたといふこと以外